

# 一般国道115号相馬福島道路遺跡発掘調査報告4

横川B遺跡

東羽黒平遺跡（2・3次調査）

2016年

福島県教育委員会  
公益財團法人福島県文化振興財團  
国土交通省東北地方整備局磐城国道事務所

# 一般国道115号相馬福島道路遺跡発掘調査報告 4

よこ かわ  
横川 B 遺跡  
ひがし は ぐろだいら  
東羽黒平遺跡（2・3次調査）



## 序 文

福島県教育委員会では、開発事業による埋蔵文化財の消失を避けるため、関係機関と協議を行い埋蔵文化財の保護と記録に努めています。

一般国道115号相馬福島道路は、常磐自動車道と東北縦貫自動車道を結ぶ約45kmの高規格幹線道路（自動車専用道路）であります。東日本大震災後、被災地の早期復興を図るリーディングプロジェクトとして位置づけられ、震災前には国道115号バイパスとして整備されていた靈山道路と阿武隈東道路を含む本道路は、福島市から相馬市までの全線が緊急整備されることになりました。

一般国道115号相馬福島道路建設用地内には、周知の埋蔵文化財や新たに発見された埋蔵文化財包蔵地が数多く確認されており、先人が残した貴重な文化遺産が点在しております。

埋蔵文化財は、それぞれの地域の歴史と文化に根ざした歴史的遺産であると同時に、我が国の歴史・文化等の正しい理解と、将来の文化の向上発展の基礎をなすものです。

福島県教育委員会では、相馬福島道路建設予定地内で確認されたこれらの埋蔵文化財の保護・保存について、開発関係機関と協議を重ね、平成19年度以降、埋蔵文化財の範囲や性格を確かめるための試掘・確認調査を行い、その結果をもとに平成25年度から現状保存の困難な遺跡については記録として保存することとし、発掘調査を実施してきました。

本報告書は、平成27年度に行なった相馬市山上地区に所在する横川B遺跡、平成26・27年度に行なった相馬市今田地区に所在する東羽黒平遺跡（2・3次調査）の発掘調査成果をまとめたものです。この報告書が県民の皆様の文化財に対する理解を深め、地域を解明するための基礎資料として、さらには生涯学習などの資料として広く活用していただければ幸いです。

最後に、発掘調査から報告書の作成にあたり、御協力・御尽力いただいた国土交通省東北地方整備局磐城国道事務所、相馬市教育委員会、公益財團法人福島県文化振興財团をはじめとする関係機関及び関係各位に対し、感謝の意を表します。

平成28年3月

福島県教育委員会

教育長 杉 昭 重



## あいさつ

公益財団法人福島県文化振興財団では、福島県教育委員会からの委託により、県内の規模な開発に先立ち、開発対象地内にある埋蔵文化財の調査を実施しています。

本報告書は、一般国道115号相馬福島道路(相馬相馬西)の建設に伴い、平成26年度と平成27年度に発掘調査を行った相馬市山上地区に所在する横川B遺跡、相馬市今田地区に所在する東羽黒平遺跡(2・3次調査)の調査成果をまとめたものです。

横川B遺跡では近世の土坑群が検出され、東羽黒平遺跡(2・3次調査)では縄文時代の土坑の他、縄文時代後期の多くの土器片や石器などが出土し、当時の人々の暮らししぶりを考える上で貴重な成果となりました。

今後、この報告書を郷土の歴史研究の基礎資料として、広く活用していただければ幸いに存じます。

終わりに、この調査にご協力いただきました国土交通省東北整備局磐城国道事務所、相馬市ならびに地域住民の皆様に深く感謝申し上げますと共に、当財団の事業の推進につきまして、今後とも一層の御理解と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成28年3月

公益財団法人 福島県文化振興財団

理事長 遠藤俊博



## 緒 言

1 本書は、平成26年度と平成27年度に実施した一般国道115号相馬福島道路(相馬相馬西)遺跡発掘調査の報告書である。

2 本書には、以下に記す遺跡の調査成果を収録した。

横川B遺跡 福島県相馬市山上字横川 埋蔵文化財番号 209500216

東羽黒平遺跡 福島県相馬市今田字東羽黒平 埋蔵文化財番号 209500212

3 本事業は、福島県教育委員会が国土交通省東北地方整備局磐城国道事務所の委託を受けて実施し、調査にかかる費用は国土交通省東北地方整備局磐城国道事務所が負担した。

4 福島県教育委員会は、発掘調査を公益財団法人福島県文化振興財団に委託して実施した。

5 公益財団法人福島県文化振興財団では、遺跡調査部の下記の職員を配置して調査にあたった。

平成26年度

文化財主査 細山 郁夫(福島県教育委員会より出向)

当該年度は調査期間中に臨時的に下記の職員の協力を得た。

専門文化財主査 小暮 伸之

文化財主査 佐藤 悅夫(福島県教育委員会より出向)

文化財主事 荒木 麻衣

平成27年度

文化財主事 由井 文菜

当該年度は調査期間中に臨時的に下記の職員の協力を得た。

専門文化財主査 菅原 桂夫

文化財主査 菊田 順幸(福島県教育委員会より出向)

6 本書の執筆は、担当職員が分担して行い、各文末に文責を記した。

7 本書に収録した調査記録および出土資料は、福島県教育委員会が保管している。

8 発掘調査および報告書の作成に際して、次の機関から協力・助言をいただいた。

相馬市教育委員会

## 用 例

1 本書における遺構図版の用例は、以下のとおりである。

- (1) 方 位 図中の方位は座標北を示す。方位記号の無いものは、図の真上を真北とする。
- (2) 縮 尺 各挿図中に縮小率を示した。
- (3) ケ バ 遺構内の傾斜部は「III」の記号で表現した。
- (4) 土 層 遺構外堆積土は大文字のLとローマ数字で、遺構内堆積土は小文字のℓと算用数字で表記した。  
(例) 遺構外堆積土…L I・L II 遺構内堆積土…ℓ 1・ℓ 2
- (5) 標 高 挿図中に示した標高は、海拔高度を示す。
- (6) 遺構番号 当該遺構は正式名称、その他の遺構は記号化した略称で記載した。
- (7) 土 色 土層注記に使用した土色は、「新版標準土色帖」に基づいている。

2 本書における遺物図版の用例は、以下のとおりである。

- (1) 縮 尺 各挿図中に縮小率を示した。
- (2) 遺物番号 挿図ごとに通し番号を付し、本文中では下記のように省略した。  
(例) 図1の2番の遺物…図1-2  
遺物写真中で遺物に付した番号は、挿図中の遺物番号と一致する。  
(例) 1-2…図1-2
- (3) 遺物計測値 ( )内の数値は推定値、〔 〕内の数値は遺存値を示す。

3 本書で使用した略号は、次のとおりである。

相馬市…SM	横川B遺跡…Y K・B	東羽黒平遺跡…HHD	土坑…SK
竪穴住居跡…SI	集石遺構…SS	土器埋設遺構…SM	溝跡…SD
鍛冶炉跡…SWK	性格不明遺構…SX	遺物包含層…SH	
焼土遺構…SG	遺構外堆積土…L	遺構内堆積土…ℓ	

4 引用・参考文献は、執筆者の敬称を省略し、各編末に収めた。

# 目 次

## 序 章 遺跡の環境と調査経過

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 地理的環境	3
第3節 歴史的環境	5
第4節 調査方法	8

## 第1編 横川B遺跡

### 第1章 遺跡の位置と調査経過

第1節 遺跡の位置と現況	13
第2節 調査経過	13

### 第2章 発見された遺構と遺物

第1節 調査成果の概要と基本土層	15
調査成果の概要(15) 基本土層(15)	
第2節 土坑	15
1号土坑(15) 2号土坑(18) 3号土坑(18) 4号土坑(19)	
5号土坑(19) 6号土坑(19) 7号土坑(19)	
第3章 まとめ	20

## 第2編 東羽黒平遺跡(2・3次調査)

### 第1章 遺跡の位置と調査経過

第1節 遺跡の位置と現況	23
第2節 調査経過	23

### 第2章 発見された遺構と遺物

第1節 調査成果の概要と基本土層	28
調査成果の概要(28) 基本土層(28)	
第2節 出土土器の分類	29
第3節 土坑	30
16号土坑(30) 17号土坑(30) 18号土坑(30)	
第4節 遺構外出土遺物	31

### 第3章 まとめ

37

## 挿図・表・写真目次

### 序 章 遺跡の環境と調査経過

#### [挿図]

図1 一般国道115号相馬福島道路位置図	1
図2 道路工事計画図	2

#### [表]

表1 周辺の遺跡一覧	6
------------	---

### 第1編 横川B遺跡

#### [挿図]

図1 遺跡・調査区位置図	14
図2 造構配置図	16

#### [写真]

1 調査区遠景	41
2 調査区現況	41
3 調査区全景	42
4 1・2号土坑	42
5 3～6号土坑	43
6 7号土坑、作業風景	44
7 3号土坑出土遺物	44

### 第2編 東羽黒平遺跡(2・3次調査)

#### [挿図]

図1 遺跡・調査区位置図	24
図2 1～3次調査区造構配置図	25
図3 2次調査区造構配置図	26
図4 3次調査区造構配置図	27
図5 16～18号土坑、16号土坑出土遺物	31
図6 造構外出土遺物(1)	33
図7 造構外出土遺物(2)	34
図8 造構外出土遺物(3)	35
図9 造構外出土遺物(4)	36
図10 主要遺物の集成	38

#### [写真]

1 2次調査区全景	47
2 3次調査区全景	47
3 3次調査区遠景	48
4 3次調査区全景	48
5 16～18号土坑、作業風景	49
6 造構外出土遺物(1)	50
7 造構外出土遺物(2)	50
8 造構外出土遺物(3)	51
9 造構外出土遺物(4)	51
10 造構外出土遺物(5)	52
11 造構外出土遺物(6)	52

# 序 章 遺跡の環境と調査経過

## 第1節 調査に至る経緯

一般国道115号相馬福島道路(相馬相馬西)建設予定地に関わる遺跡発掘調査は、福島県教育委員会との委託契約に基づき、平成25年度から公益財團法人福島県文化振興財團遺跡調査部が実施している。今回の報告は、平成26年度と平成27年度にまたがるので、以下、年度ごとに調査に至る経緯を記述する。

### 平成26年度

平成26年度は、遺跡調査部の職員1名を配置して実施した。年度当初で確定していた調査遺跡と面積は、平成25年度に1次調査を行った東羽黒平遺跡の2次調査1,300m<sup>2</sup>である。しかし、その後計画は大きく変更することになる。

4月下旬の協議の段階では、工事側から用地買収と工事契約が既に終了し、立木の伐採については6月末頃に完了する見通しが示されたことを受け、調査は7月上旬以降に着手することが決められていた。

ところが、6月上旬になって、立木の伐採完了が7月中旬にずれ込むこと、また、傾いたケヤキが1本あり、これを伐採すると電柱と光ファイバーケーブルを損壊する危険があるため、これを伐採せずに調査して欲しい旨の申し入れがあった。さらに7月上旬には、電柱と光ファイバーケーブルの移設が終了する平成27年1月までケヤキを伐採しない意向が示されたため、今年度の調査をどうするのか協議がもたれた。その結果、ケヤキのある調査区西側800mは次年度に送ることとし、平成26年度は調査区東側500mのみを調査することで、最終合意した。

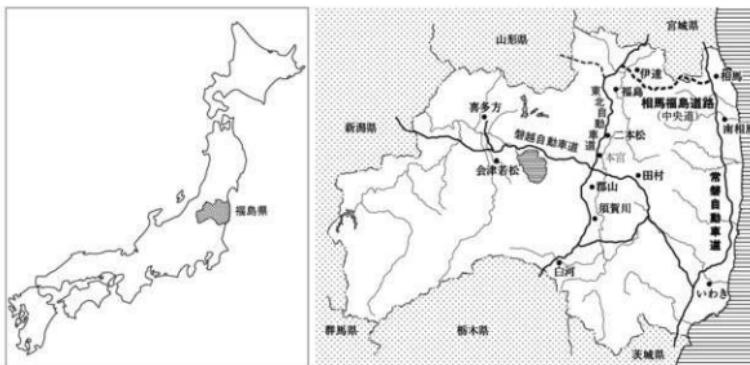


図1 一般国道115号相馬福島道路位置図

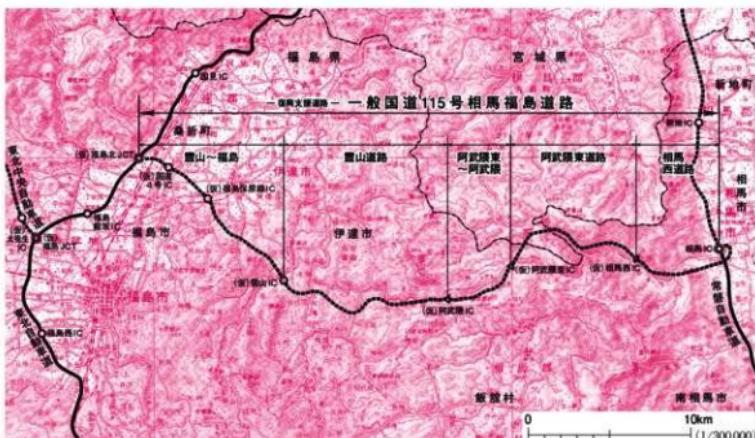


図2 道路工事計画図

以上の経緯を経て、調査は8月4日に着手した。同月上旬にはプレハブ・トイレ・駐車場用地の造成及び設置を行い、重機による表土剥ぎを行った。益休み明けの同月18日からは、作業員による遺構検出作業を開始し、同月20日には、測量基準杭の打設を完了した。調査区内は搅乱と段丘疊が多く、作業は難航したが、土坑1基が検出され、縄文時代後期前葉を主体とする土器片がまとまって出土した。その後、9月26日までに実質的な作業を終了し、10月9日に現地引き渡しを行って調査を終了した。

なお、11月に実施した相馬市山上地区の試掘調査で横川B遺跡が発見され、1,100m<sup>2</sup>が要保存面積として加わった。  
(細山)

#### 平成27年度

平成27年度は、前年度の体制を引き継ぎ、遺跡調査部の職員1名を配置して実施した。年度当初で確定していた調査遺跡と面積は、東羽黒平遺跡の3次調査800m<sup>2</sup>、横川B遺跡1,600m<sup>2</sup>である。課題となつたのは、横川B遺跡の発見が予算要求の後の時期だったため、遺構・遺物の出方によつては増額予算を組まなくてはならない必要があること、また、調査区が塩手山トンネルの掘削工事ヤード内に位置するため、靈山道路を含めた事業計画全体の中で最も高い緊急性を要したが、靈山道路の福田遺跡の調査開始も工事側から早急にして欲しいという要望があったことである。そのため、管轄する国土交通省東北地方整備局磐城国道事務所、福島河川国道事務所の双方と協議した結果、今年度の調査工程は、5～6月(相馬西道路：横川B遺跡→東羽黒平遺跡3次)→7月以降(靈山道路：福田遺跡→沼ヶ入遺跡)の順で行うこと、東羽黒平遺跡の調査内容が見えた6月の段階で、増額予算を計上することで合意した。

また、プレハブ・駐車場用地は横川B遺跡がヤード内の橋脚下、東羽黒平遺跡が工事側の借地に

確保できること、懸案だった東羽黒平遺跡の電柱と光ファイバーケーブルの移設は、横川B遺跡の調査期間中に終了させることを併せて確認した。

以上の経緯を経て、まず横川B遺跡の調査に着手した。5月12日に表土剥ぎを開始して、13日から作業員を投入し遺構検出を行ったところ、その週のうちに円形の土坑が尾根平坦面と斜面上に分かれて分布しており、出土遺物量は少ないことが判明した。この結果を受け、5月下旬の協議で、6月4日に現地引き渡しを行うことを決め、5月29日に実質的な現地作業を終了し、6月1・2日に器材片付けと全景写真撮影を行って、4日に現地引き渡しを行うことができた。

なお、5月下旬の協議では、東羽黒平遺跡の現地説明会を開催して欲しいという要望が工事側から出されたが、調査期間がきわめて短いため難しく、調査終了後の8月以降に地元公民館などを借りて成果報告会を開いてはどうかという案が文化財側から示され、合意された。

続く東羽黒平遺跡3次調査は、6月23日に表土剥ぎを開始して、25日から作業員を投入し遺構検出作業に取り掛かった。その結果、遺構数は土坑2基にとどまったが、1次調査B区からの続きで縄文土器片が比較的まとまって出土した。その後、7月上旬は蒸し暑い日が続いたが調査は順調に進捗し、7月17日までに実質的な作業を終了させ、7月23日にプレハブ・トイレ撤去、7月28日に現地引き渡しを行って、3次にわたる東羽黒平遺跡の調査を完了した。

なお、成果報告会については、8月下旬の協議で「相馬西道路 遺跡発掘調査成果報告会」の名称で開催することが正式に決められ、10月17日に今田研修所において熱心な地域住民の参加のもと実施した。会場には、ハート形土偶をはじめ主な遺物を展示すると共に、周辺遺跡を含めた成果を担当調査員がパワーポイントで解説した。

また、今年度の試掘調査では新たな保存面積が追加されず、一般国道115号相馬福島道路(相馬相馬西)建設予定地に関わる遺跡発掘調査は、東羽黒平遺跡3次調査をもって終了することとなった。

(菅原)

## 第2節 地理的環境

福島県は東北地方の南端、太平洋に面し、北海道、岩手県に続き全国3番目の面積13,782km<sup>2</sup>を有する。県土の約8割は山地であり、南北に並行する越後山脈、奥羽山脈、阿武隈高地によって、地理的に3地域に区分される。

一般に奥羽山脈以西は「会津地方」、奥羽山脈と阿武隈高地に挟まれた阿武隈川流域は「中通り地方」、太平洋に面した海岸地帯は「浜通り地方」と呼ばれ、相馬市はこの浜通り地方の北部に位置し、東西28km、南北13kmにわたる。横川B遺跡は、松川浦海岸線から西に約11km内陸、市街地中心から南東6kmの位置にある。東羽黒平遺跡は、松川浦海岸線から西に約8km内陸、市街地中心から南東3kmの位置にある。

当地域の地形は、市の西側を南北に走る双葉断層(岩沼-久ノ浜構造線)を挟んだ東西で大きく異

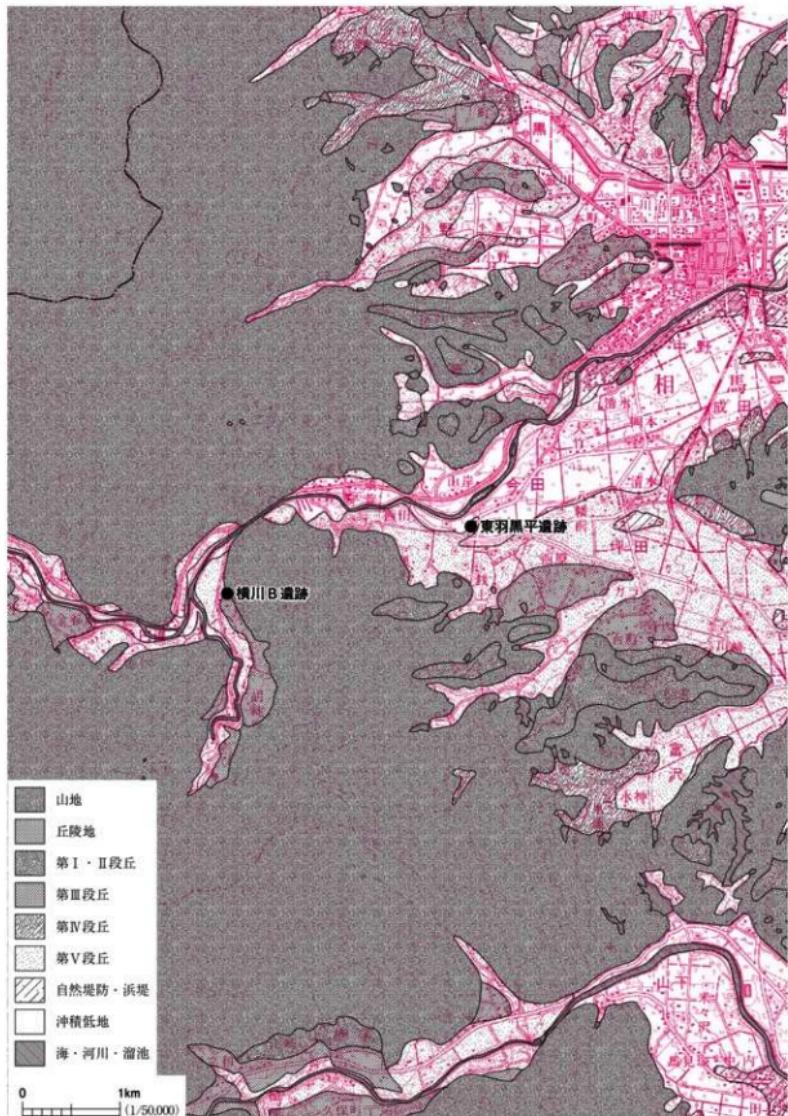


図3 遺跡周辺の地形分類図

なり、西方は阿武隈高地東縁の準平原地形、東方は浜通り低地帯に分けられる。準平原地形には、靈山(標高825m)や手倉山(672m)・彦四郎山(635m)などの山々が発達し、おおむね400~500mのなだらかな地形を形成している。一方、浜通り低地帯は山麓丘陵部と沖積平野部に大きく分かれ、丘陵を開析した段丘面も数面確認されている。

丘陵部は東流する宇多川・小泉川・地蔵川・日下石川などの河川に南北を挟まれるため東西方向に発達し、北方および東方に高度を減じて、海岸部では磯を形成する。この丘陵の南岸を利用して集落が営まれることが多い。沖積平野部は河川流域にみられ、河岸段丘・扇状地の他、松川浦や新沼浦といった潟湖がみられる。

相双地区にはこれまでⅠ~Ⅴ面の段丘面が知られており、本地域ではⅡ~Ⅴ面に相当する高位段丘・低位上位段丘・低位下位段丘・最低位段丘が確認できる。段丘は、東西に走る丘陵を開析する宇多川・小泉川・地蔵川・日下石川の流域に発達し、横川B遺跡と東羽黒平遺跡が立地するのは宇多川南岸の段丘である。段丘間は沖積低地が発達し、ここに平野堆積物・砂州堆積物などが認められ、海岸に至っている。

なお、相馬市の気候は太平洋気候区に属し、夏は涼しく冬は暖かい温暖な地域である。年間平均気温は12℃、年間降水量約1,300mm、年間日照時間2,360時間測る。一年を通して乾燥した晴天の日が多く、降水量が少ないため、水不足に悩まされることがある。また、梅雨期に吹く北東風(やませ)の影響で、日照不足・低温が続き、農作物に打撃を与えることもしばしば認められる。

(細山)

### 第3節 歴史的環境

相馬市では、戦後直後の各調査機関による発掘調査のほか、『相馬市史』の編纂や『福島県遺跡地図』作成、近年では相馬地域開発や一般国道6号相馬バイパス・一般国道113号バイパス・常磐自動車道・相馬第二用水などの建設に伴う発掘調査が実施されている。なかでも、東羽黒平遺跡の東側では、近接して常磐自動車道建設に伴った調査が継続して行われ、遠古の姿が徐々に明らかになってきている。以下、時代毎に今回の調査地周辺の歴史的環境について述べる。

#### 旧石器時代

当地域の最古の遺跡は、旧石器時代に遡る。北原遺跡(51)でナイフ形石器、段ノ原A遺跡(48)・段ノ原B遺跡(49)でナイフ形石器や細石刃核、三貫地遺跡(53)では剥片や石核が一万点以上出土しており、中には石刃技法を用いた接合資料も認められた。この時代の遺跡は、まだ調査例が少なく、段丘上に点在して分布している。

#### 縄文時代

遺跡数、調査例が増加し、早期後葉から人々の営みが確認されている。旧新沼浦周辺では、師山遺跡(61)で早期後葉～前期初頭の住居跡と遺物包含層、山中B遺跡(59)では遺物包含層が検出され

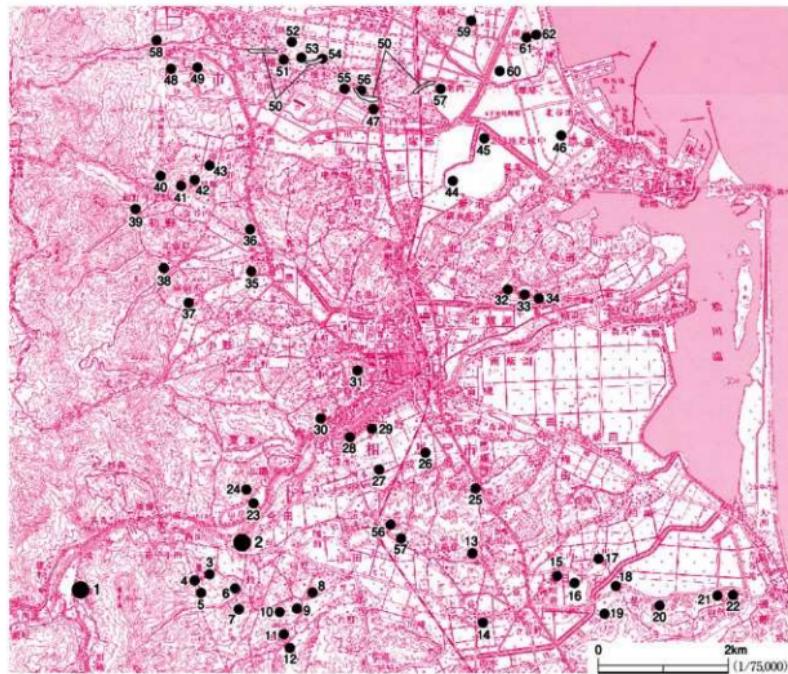


図4 周辺の遺跡位置図

表1 周辺の遺跡一覧

No	遺跡名	種別	時代	No	遺跡名	種別	時代	No	遺跡名	種別	時代
1	横川B	集落跡	近	23	明持	集落跡	近・古	45	古川尻B	散布地	墳・中
2	東羽高平	集落跡	墳・平・古	24	山川堀跡	散布跡	古・花	46	箕原	散跡跡	近・代
3	上武A	散布地	墳	25	船越塚穴古墳群	古	墳	47	新光寺	古 路	古・古
4	上武B	散布地	墳・金・平	26	御手塚	散布地	墳・世	48	段ノ原A	集落跡	近・墳
5	一里坂	散布地	墳	27	丸井吉原	古	墳	49	段ノ原B	集落跡	旧・墳・古
6	前原	散布地	墳	28	照葉堂跡	城垣跡	中	50	蓬境土塁	土 墓	近
7	鈴上平	駆逐跡		29	黒木田	都鄙関連	古	51	北原	集落跡	旧・墳・古
8	御飯殿	散布地	墳・平	30	西山塚穴古墳群	古	墳	52	三貫地貝塚	貝 塚	墳
9	金草丘	散布地	墳・平	31	相馬中村城跡	城垣跡	中・近	53	三貫地	集落跡	旧・墳・古
10	金草A	墳		32	猪股A 遺跡	集落跡	墳・墳・古	54	鹿田	集落跡・古墳	墳・墳・古
11	大沢口空跡	墳 路	近	33	猪股古墳群	古	墳	55	聖	散布地	墳・古
12	山田	散布地	墳・金・平	34	木下和田塚穴古墳群	古	墳	56	地B	散布地	墳・金・古
13	北山空跡	墳 路	金・平	35	黒木城跡	城垣跡	中	57	大森A	水田跡	墳・墳・古
14	立谷古墳群	城垣跡	中	36	鳴見塚	集落跡	墳	58	白子子C	集落跡	墳・古
15	地ノ内	散布地	墳	37	宿野木A	集落跡・散布地	墳・墳・古	59	山中B	散布地	墳・墳・古
16	地ノ内古墳	古	墳	38	西宮前	集落跡	古・古	60	南川尻B	散跡跡	近
17	北者地	散布地	金・平	39	弘川	集落跡	古	61	鶴山	散布地	墳
18	鳥喰	散布地	金・平	40	猪食A	駆逐跡	古	62	双子	散跡跡	墳・瓦
19	妻田	散布地	金・平	41	猪食B	集落・駆逐跡	墳・古				
20	大道	散布地	墳・平	42	山田B	集落・駆逐跡	墳・古				
21	山田田貝塚	貝 塚	墳・金・平	43	山田A	駆逐跡	古				
22	道片塚	貝 塚	金・平	44	古川尻A	散布地	墳				

時代略記 旧：旧石器 機：機械 弥：弥生 墳：墳古  
金：金長 平：平安 古：古代 中：中世  
近：近世 代：近代

た。また、内陸の北猿沢A遺跡では、早期後葉の住居跡、土坑が調査されている。

前期前葉では、段ノ原A遺跡(48)・段ノ原B遺跡(49)・山田B遺跡(42)・猪倉B遺跡(41)において、各遺跡100軒を超える集落跡、宿仙木A遺跡(37)では土坑が見つかっている。この時期の遺跡は丘陵地帯の西部に分布する傾向がある。前期中葉～中期前葉にかけては、師山遺跡(61)・宿仙木A遺跡(37)・武井E遺跡・山中B遺跡(59)・双子遺跡(62)などから、当該期の包含層や遺物が確認されるが、集落に関しては不明である。

中期中葉では、師山遺跡(61)で、住居跡1軒が認められるものの、集落規模は不明である。中期末葉になると、山海道遺跡・川窪遺跡・高田遺跡(54)・三貴地遺跡(53)・馬見塚遺跡(36)などで、複式炉をもつ住居跡が見つかり、大規模な集落跡が確認できる。大槻遺跡では同様の住居跡1軒が確認されているが、小規模な集落跡である可能性が高い。

後期～晩期では、国指定史跡で、後期後葉の土器型式である新地式の標識遺跡である新地貝塚、埋葬人骨が多数見つかった三貴地貝塚(52)が知られている。大森A遺跡(57)では、後期前葉の櫛状木製品と晩期の丸木弓、双子遺跡では後期中葉の丸舟舟などの木質遺物が出土している。

そのほか、鷺塚遺跡(46)・師山遺跡(61)などで、晩期の土器が見つかっており、沖積地に面した低い段丘上に小規模な集落が営まれていた様子がうかがえる。

#### 弥生時代

当該地域で最も古い弥生時代の遺跡は藤堂塚遺跡(26)で、前期から中期初頭の再葬墓が確認されている。中期後葉では、柴迫A遺跡(32)で桜井式期の集落跡、武井D遺跡・向田E遺跡で住居跡が調査されており、武井E遺跡・向田G遺跡では土器植墓が検出された。聖遺跡(55)・境B遺跡(56)・善光寺遺跡(47)などでも、当該期の土器や石器が出土している。また、双子遺跡・師山遺跡では後期の天王山式の包含層が見つかっており、この時期も小規模な集落が丘陵地上に点在していくようである。南倉塚遺跡(38)ではアメリカ式石鐵が出土しており、近隣に当該時期の集落が形成されていた可能性がある。

#### 古墳・飛鳥時代

古墳時代前期では山中遺跡があり、塙釜式期の土師器が集中して出土し、祭祀跡であることが指摘されている。砂子田遺跡では4～6世紀の土器が出土し、7世紀には集落が営まれている。古川尻A遺跡(44)では6世紀とみられる埋没住居の存在が確認され、大森A遺跡(57)では6～9世紀にかけての水田関連構造とともに、馬鍔等の木製農機具が出土している。このほか、川窪遺跡・三貴地遺跡(53)・山中B遺跡(59)・宿仙木A遺跡(37)などで、この時期の集落跡が調査されている。

古墳はそれぞれの段丘で古墳群が形成され、発掘調査例も多い。人物・馬形・円筒埴輪を伴う丸塙古墳(27)や金銅製雲珠や承盤付枕が出土した高松1号墳がよく知られ、柴迫古墳群(33)・本笑和田横穴墓群(34)、金銅製双龍環頭大刀柄頭が出土した福迫横穴墓群(25)・西山横穴墓群(30)など、宇多川流域では横穴墓が多数認められる。

### 奈良・平安時代

奈良・平安時代の当地域は宇多郡に属し、代表的な遺跡には宇多郡衙または寺院に比定されている黒木田遺跡(29)がある。遺跡からは単弁八葉蓮華文軒丸瓦や複弁八葉蓮華文軒丸瓦が出土している。これらの瓦の主な供給源としては、善光寺遺跡(47)があり、瓦陶兼用窯を含む10基の直立煙道緩傾斜窯跡を確認している。また、製鉄関連遺跡では、7~10世紀にかけて大規模な施設が武井地区遺跡群(向田E遺跡、向田G遺跡、武井D遺跡、武井E遺跡)のほか、丘陵地西部の山田A遺跡(43)・猪倉B遺跡(41)等でも確認され、製鉄炉跡・木炭窯跡・鍛冶炉跡・木炭焼成土坑・鑄造構等が検出された。また、払川遺跡(39)や赤柴前遺跡を含め、近隣で確認される木炭焼成土坑の多くは当該時期の所産である可能性が高い。

集落跡では、明神遺跡(23)や三貴地遺跡(53)原口地区・北原遺跡(51)・宿仙木A遺跡(37)・南萱倉遺跡(38)・大槻遺跡などで、竪穴住居跡や掘立柱建物跡等が確認されている。新地町から宮城県伊具郡丸森町にわたって位置する五社塙遺跡では、奈良から平安時代にかけての墳墓跡が確認され、当時の人々の信仰の対象であったことがうかがえる。山上地区の山岸硝庫跡(24)では、8世紀中葉の特異な須恵器藏骨器を伴う火葬墓が発見され、近江の製鉄集団の墓制の影響が指摘されている。

### 中世以降

中世の当地域は、文治5(1189)年の源頼朝の「奥州征伐」の功により、千葉氏(相馬氏)の支配に入るが、南北朝まではその支配は不安定であったよう、黒木城跡(35)や熊野堂館跡(28)といった館跡が、南朝の居城である靈山城の搦手として築城されている。

相馬氏は、15世紀後半に宇多庄の支配を確立したとみられる。近世初頭に仙台藩と相馬藩の境界が確定すると、境界に沿って藩境土塁(50)が構築され出入口には番所が設けられた。この境界はほぼ現在の行政区境と一致し、仙台藩側が新地町、相馬藩側が相馬市となっている。相馬藩は慶長16(1611)年、中世以来の居城であった南相馬市の小高城から中村城(31)へと居を移し、以後、中村城は相馬6万石の居城として城下を成立させる。宇多川北の丘陵に穴を穿ち造られた山岸硝庫跡(24)は、相馬藩の火薬庫として『奥相誌』にも記述が残る。また、近世の当地域では旧新沼浦で製塩が展開し、鷺塚遺跡(46)や古川尻B遺跡(45)などから入浜式製塩法を用いた製塩関連遺構が検出されている。

明治4(1871)年7月廢藩置県により成立した中村県は、同年11月磐前県に編入される。以後、宇多郡の中心地として成長した当地域は、明治22(1889)年に中村町、次いで昭和29(1954)年に周辺の7村を合併し相馬市として成立し、現在に至っている。

(菊 田)

## 第4節 調査方法

横川B遺跡と東羽黒平遺跡(2・3次調査)では、原則的に当財團で踏襲されてきた調査方法を用いている。そこで、以下に一括して述べる。

本事業の発掘調査では、遺跡や遺構の位置を世界測地系の座標値で示している。具体的には、世界測地系に基づく国土座標IX系の座標を用いた。

遺跡や遺物の大まかな地点を示すために、10m単位のグリッドを設定した。グリッドの呼称は、南北方向に1・2・3…と算用数字、東西方向にA・B・C…とアルファベットを用い、これを組み合わせてA 1・B 2・C 3…とした。

調査は現表土と盛土の除去に重機を用い、それ以外の堆積土および遺構内堆積土の掘削は基本的に人力で行っている。遺構は精査にあたり、その特性や規模・遺存状態等に応じて土層観察用畔を残し、土層の堆積状況や遺物の出土状況に留意しながら進めた。具体的には、土坑は2分割法を採用し、自然堆積か人為堆積かの識別を行った。

遺構の記録は、平面図と土層断面図の作成を原則とし、平面図については、測量基準点をもとに光波測距儀を使用して測量し、現場で結線した。断面図については、遺構内に移動した簡易水準点をもとに作図した。各遺構及び土層の図化に際しては、1/20の縮尺を原則とし、遺構の規模・性格に合わせて1/40の縮尺も適宜使用した。また、遺跡基底面の地形図は原則として1/200の縮尺で作成した。遺物は、遺構及びグリッド単位で取り上げを行い、出土層位を記録している。

写真は35mm判のモノクロームとカラーリバーサルフィルムカメラを使用するとともに、補助的にデジタルカメラを用い、同一被写体で撮影を行った。

これらの調査記録および出土遺物については、報告書刊行後に当財團の定める基準に従って整理を行い、福島県教育委員会へ移管した後、福島県文化財センター白河館に収蔵される予定である。

(由 井)



横川8遺跡作業風景



# 第1編 横川 B 遺跡

遺跡記号 SM-YK・B  
所在地 相馬市山上字横川  
時代・種類 近世の集落跡  
調査期間 平成27年5月12日～6月4日  
調査員 菅原祥夫・菊田順幸・由井文菜



# 第1章 遺跡の位置と調査経過

## 第1節 遺跡の位置と現況

横川B遺跡は、福島県浜通り地方北部の相馬市山上字横川に所在する。一帯は、狹隘な宇多川上流域に形成された河岸段丘の南岸にあたり、標高73.0～78.5mを測る西向き斜面上に立地する。相馬市街地からは、約6km南東に離れた山間部で、中通り地方の福島市へ抜ける国道115号線(かつての中村街道)のルート沿いである。

周囲の遺跡は、約70m東に横川遺跡が位置している。

現況は山林・畑・荒地であるが、発掘調査の開始時点で、既に塙手山トンネルの掘削工事ヤード内に入っており、調査区の真下を大型機械が頻繁に往来する状態となっていた。  
(菅 原)

## 第2節 調査経過

今回の調査範囲は、平成26年度の試掘調査の結果、要保存面積に確定した1,600m<sup>2</sup>が対象となった。調査期間は、平成27年5月12日～6月4日にわたる、延べ14日間である。

事前準備として、4月28日に器材を搬入し、ゴルデンウィーク明けの5月11日に重機を搬入、翌12日から表土剥ぎを開始した。当初は地山主体の客土が厚く、どこまで掘り下げるか判断に迷ったが、その日のうちに土坑3基が確認された。5月13日からは作業員を投入し、表土剥ぎが終了した範囲から順次、遺構検出作業にとりかかった。以降、作業は順調に進捗した。15日までには、円形の土坑が尾根平坦面と斜面上の2箇所に分かれて分布している様子が確認された。

なお、調査区はトンネル掘削ヤード内に取り込まれ、工事用大型車両の往来が激しいため、作業員のヤード内通行は指定された安全通路を1列で歩くことを義務づけた。

5月19日に、委託業者による測量基準杭打設を行い、翌20日から遺構平面図と地形図作成にとりかかった。また、5月20日は現場連絡所で連絡調整会を開催し、当初の予定通り6月初旬に現地引き渡しが行える見通しであることを報告した。この前後から小雨の日が続き、地面にムシロを敷いて作業の安全確保を行ったが、大半の遺構は既に調査を終了していたので、大きな問題にはならなかった。

その後、実質的な作業を5月29日に終了し、6月1・2日に器材片付けとトンネル側から全景写真撮影を行って、4日に現地引き渡しを行った。そして、10日には器材を東羽黒平遺跡へ移動、11日にプレハブ・トイレを撤去して、全ての作業を完了した。  
(由 井)

第1編 横川B遺跡

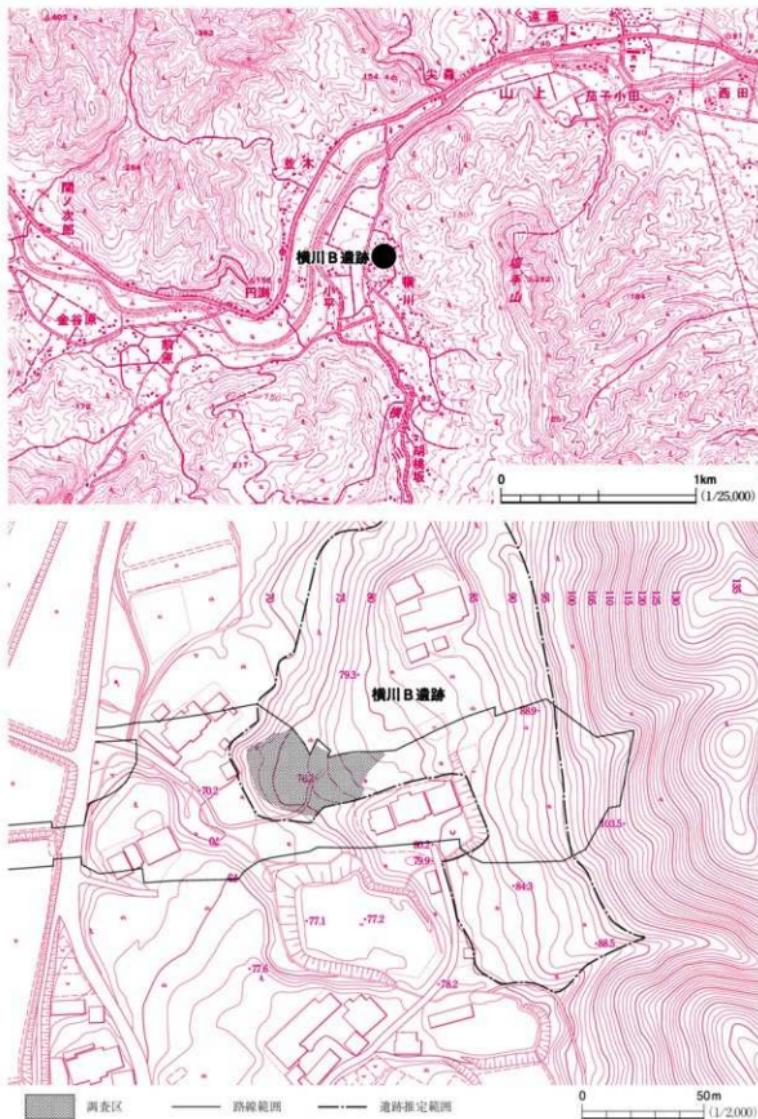


図1 遺跡・調査区位置図

## 第2章 発見された遺構と遺物

### 第1節 調査成果の概要と基本土層

#### 調査成果の概要

横川B遺跡の調査では、土坑7基が発見された。いずれも円形をなすもので、遺構分布はF3・F4グリッド、およびC4・D4グリッドの2グループに大別できる。遺物は、近世の大堀相馬焼がF3グリッドの3号土坑から出土したのみであったが、齊一的な形状に加え、堆積土も近似していることから、すべて同時期の所産とみられる。

遺構外からの出土遺物は無かった。

#### 基本土層

基本土層は、色調・土質の諸特徴からL I～L Vに分層し、L IIはさらにL II aとL II bに細分している。以下、説明する。

- L I 暗褐色土(10YR3/3)である。客土・耕作土を含む表土層で、層厚は35～60cmを測る。
- L II a 黒褐色土(10YR3/2)である。しまりのあるやや粘質の旧表土で、層厚は10～20cmを測る。
- L II b 暗褐色土(10YR3/4)である。しまりのあるやや粘質の旧表土で、層厚は10～20cmを測る。
- L III にぶい黄褐色土(10YR5/4)である。しまりのある粘質の基盤層で、斜面上位に分布する。層厚は40cm以上を測る。上面は遺構検出面である。
- L IV 明黄褐色土(10YR6/8)である。しまりのある粘質の基盤層で、斜面中位中心に分布する。層厚は35cm以上を測る。遺構検出面である。
- L V 褐色土(10YR4/4)である。こぶし程度の礫を多く含む基盤層で、斜面下位の所々に分布し、層厚は20cm以上を測る。遺構検出面である。

(菅原)

### 第2節 土 坑

今回の調査で発見された土坑は7基である。円形の形状に齊一性が認められ、遺存状態は比較的良好だった。以下、登録番号順に述べる。

#### 1号土坑 SK01(図3、写真4)

D4グリッドのやや急斜面上に位置する。検出面はLV上面で、西3mに6・7号土坑がある。他の遺構との重複は無い。

第1編 横川B遺跡

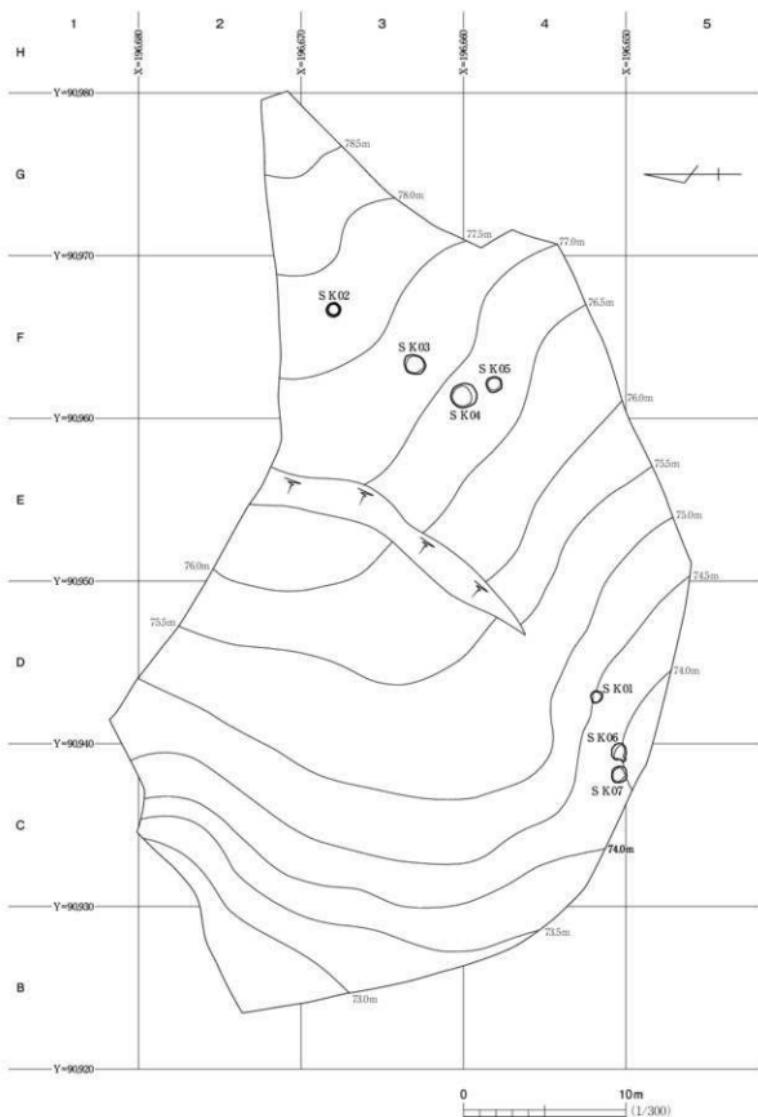


図2 遺構配置図

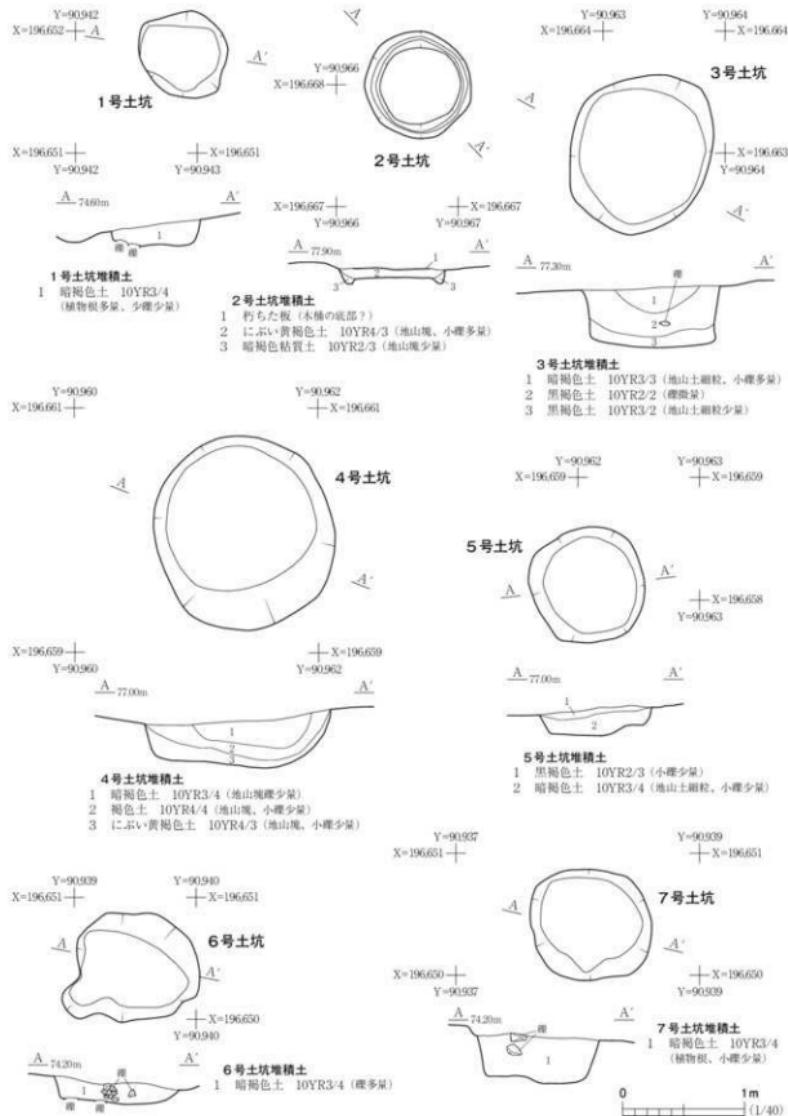


図3 1~7号土坑

平面形は不整円形で、長径80cm、短径68cm、検出面からの深さは22cmである。底面には自然石が露出し凹凸があるが、壁はほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は1層で、小礫を少量に含む暗褐色土である。

出土遺物が無く、詳しい時期は不明だが、堆積土の状況から近世のものと考えられる。(菊田)

### 2号土坑 SK 02(図3、写真4)

F 3グリッドの緩斜面上に位置する。検出面はL III上面で、南西5mに3号土坑がある。他の遺構との重複は無い。

平面形は直径88cmの円形で、底面までの深さは最大12cmである。底面は平坦で、壁際に幅12cm、深さ5cmの溝が巡っている。堆積土は3層に分層したが、ℓ 1は木の繊維が木目状に残っており、ここに板があったと推測される。ℓ 2は黄褐色土、ℓ 3は暗褐色土でいずれも地山塊を多く含むため人為的に埋めたと考えられる。

出土遺物は無いが、ℓ 1上面に木板の痕跡があり、また断面の形状から、ここには桶のようなものが埋設されていたと考えられる。詳細な時期は不明だが、木板の痕跡が確認できたことから、近世の遺構であると考えられる。(菊田)

### 3号土坑 SK 03(図3・4、写真5・7)

調査区東部のF 3グリッド、L III上面で検出された。南西約2mには4号土坑、北東約5mには2号土坑が隣接している。他の遺構との重複は無い。

平面形はやや不整な円形で、規模は、長径136cm、短径120cmで、検出面からの深さは50cmを測る。壁は、急な角度で立ち上がり、底面は平坦である。

堆積土は3層に分かれる。ℓ 1は地山土細粒、小礫を多量に含んだ暗褐色土、ℓ 2は礫を少量含んだ黒褐色土、ℓ 3は地山土細粒を少量含んだ黒褐色土である。

遺物は大堀相馬焼片4点が出土した。

図4-1・3は高台の付く碗の底部～体部である。1は内外面にぶい黄橙色、3は内外面に明青灰色の釉薬が掛かる。2は小型鉢とみられ、内外面にぶい黄橙色の釉薬が掛かる。4は体部上半～口縁部が直立気味に立ち上がる小型鉢で、外面に青灰色の釉薬が掛かる。

本土坑が営まれたのは、出土遺物の特徴から近世と考えられる。

(由井)

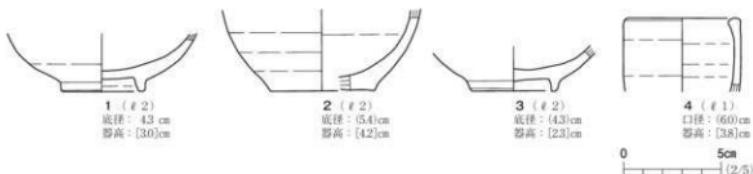


図4 3号土坑出土遺物

## 4号土坑 SK 04(図3、写真5)

F 3～4グリッドの緩斜面上に位置する。検出面はしⅢ上面で、北に3号土坑、南に5号土坑がある。他の遺構との重複は無い。

平面形はほぼ円形で、長径156cm、短径144cm、底面までの深さは48cmである。底面はほぼ平坦で、壁は底面付近がなだらかであるが、その後ほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は3層に分層したが、ℓ 2・3は人為的に埋め戻した層と考えられる。

堆積土から遺物は出土しなかった。しかし、堆積土の特徴および近接した3号土坑の出土遺物から、近世のものと考えられる。  
(菊田)

## 5号土坑 SK 05(図3、写真5)

調査区東部のF 4グリッド、L IV上面で検出された。北西約80cmには4号土坑、北約3.8mには3号土坑が隣接している。他の遺構との重複はない。

平面形はやや不整な円形で、規模は、長径94cm、短径91cmで、検出面からの深さは、最も深いところで23cmを測る。壁は、急な角度で立ち上がる。

堆積土は2層に分かれる。ℓ 1は小礫を少量含んだ黒褐色土、ℓ 2は地山土細粒、小礫を少量含んだ暗褐色土である。遺物は出土していない。

本土坑の詳細な時期は不明だが、周辺の遺構から近世の遺構と考えられる。  
(由井)

## 6号土坑 SK 06(図3、写真5)

C 4グリッドのやや急斜面上に位置する。検出面はLV上面で、西直近に7号土坑がある。

平面形は不整楕円形で、長径115cm、短径85cm、検出面からの深さは22cmである。底面は自然石が多く露出し、凹凸が多い。壁は一部垂直に立ち上がるが、北東方向はなだらかに立ち上がる。堆積土は1層で、礫を多量に含む暗褐色土である。

出土遺物が無く、詳細な時期は不明だが、周辺の遺構の状況から近世の遺構と考えられる。  
(菊田)

## 7号土坑 SK 07(図3、写真6)

C 4グリッド南端のやや急斜面上に位置する。検出面はLV上面で、東直近に6号土坑がある。

平面形は楕円形で、長径108cm、短径90cm、検出面からの深さは40cmである。底面は自然石が露出しているためやや凹凸があり、壁はほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は1層で、礫を含んだ暗褐色土である。

出土遺物が無く、詳細な時期は不明だが、周辺の遺構の状況から近世の遺構と考えられる。  
(菊田)

### 第3章 まとめ

横川B遺跡の調査では土坑7基が検出され、それらの平面分布は、次の2グループに分けられた。

- ◎Aグループ F3・F4グリッド…2～5号土坑
- ◎Bグループ C4・D4グリッド…1・6・7号土坑

Aグループは標高の高い緩斜面上に立地し、小型(平均径約80～100cm)と大型(平均径約120～150cm)の2タイプで構成される。それに対して、Bグループは標高の低い急斜面上に立地しており、小型の1タイプのみで構成される。

しかし、すべて円形を呈しており、よく似た暗褐色土の堆積が認められることから、同一時期の所産である可能性が高い。具体的には、3号土坑で大堀相馬焼が出土しているので、近世に営まれたものと考えられる。また、2号土坑のみは桶を掘えていた痕跡が検出されているが、具体的性格は不明である。

本遺跡の周辺には、宇多川沿岸の狭隘な河岸段丘上に近世以来の小集落が点在しており、今回検出された遺構は、こうした近世集落の生活痕跡の一部であると思われる。  
(菅原)

#### 引用・参考文献

- 相馬市史編さん室 2013 『相馬市史』第6巻資料編Ⅱ近世2(近世村社会編)  
福島県教育委員会 2009 『常磐自動車道遺跡調査報告54 後田A遺跡』  
東北陶磁文化館 1987 『東北の近世陶磁』  
福島県立博物館 1990 『企画展 東北の陶磁史』  
福島県教育委員会 1989 『国营猪戸川農業水利事業遺跡調査報告 中平遺跡』  
山田秀安 2001 『大堀相馬焼の歴史 上巻』蒼海社  
山田秀安 2003 『大堀相馬焼の歴史 下巻』蒼海社

## 第2編 東羽黒平遺跡（2・3次調査）

遺跡記号	S M - H H D
所在地	相馬市今田字東羽黒平
時代・種類	縄文時代・平安時代の集落跡
調査期間	(2次調査) 平成26年8月4日～9月26日 (3次調査) 平成27年6月23日～7月17日
調査員	(2次調査) 小暮伸之・細山郁夫・ 佐藤悦夫・荒木麻衣 (3次調査) 菅原祥夫・菊田順幸・ 由井文菜



# 第1章 遺跡の位置と調査経過

## 第1節 遺跡の位置と現況

東羽黒平遺跡は、浜通り地方北部の相馬市今田字東羽黒平に所在する。一帯は、宇多川南岸の開けた河岸段丘にあたっており、標高24～27mを測る北向きの緩斜面上である。相馬市街地からは約3km南東に離れ、中通り地方の福島市へ抜ける国道115号線(かつての中村街道)のルート沿いである。

調査開始前の現況は、直径1m近くの切株が密集した状態だった。

なお、平成26年度に調査を実施した2次調査区は、1次調査B区と1次調査C区の中間の500m、平成27年度に調査を実施した3次調査区は、1次調査C区の北側の800mが対象となつた。

(菅原)

## 第2節 調査経過

### 2次調査

2次調査は平成26年8月4日～9月26日にわたり、500m<sup>2</sup>を対象に延べ32日間実施した。盆前の8月上旬には、プレハブ・トイレ・駐車場用地の造成及び設置を行い、重機による表土剥ぎを行った。盆休み明けの18日からは、作業員による遺構検出作業を開始し、20日には、測量基準杭の打設を完了した。調査区内は搅乱と段丘疊が多く、遺構検出作業は難航した。縄文時代後期前葉を主体とする土器片がコンテナ(60×44×15cm)1箱分出土したが、遺構は確認されなかった。

9月上旬には土坑1基が検出されたため、その精査を行った。中旬には地形測量と遺跡の全景撮影を行い、調査終了に向けての撤収作業も開始した。器材搬送、プレハブ・トイレの撤去を含めた全作業が終了したのは、26日である。10月9日には、今年度調査区の引き渡しを現地で行った。

(細山)

### 3次調査

3次調査は、平成27年6月23日～7月17日の延べ19日間にわたり、800m<sup>2</sup>を対象に行った。

事前準備として、6月15・16日にプレハブ・トイレ用地を造成し、25日の作業員投入とあわせて、24・25日にプレハブ・トイレの設置を行った。表土剥ぎは6月23日から開始し、密集した太い切株に苦戦しながらも25日には終了させることができた。以後は遺構検出に拍車がかかり、その結果、調査区東部を中心に縄文土器片がまとまって出土し始め、土坑2基が検出された。

6月30日には、現地に残っていた2次調査の杭を利用して測量基準杭の打設を行い、遺構平面図と地形図の作成を開始する。この頃から、梅雨末期の蒸し暑い日が続いたが、調査は順調に進捗

## 第2編 東羽黒平遺跡（2・3次調査）

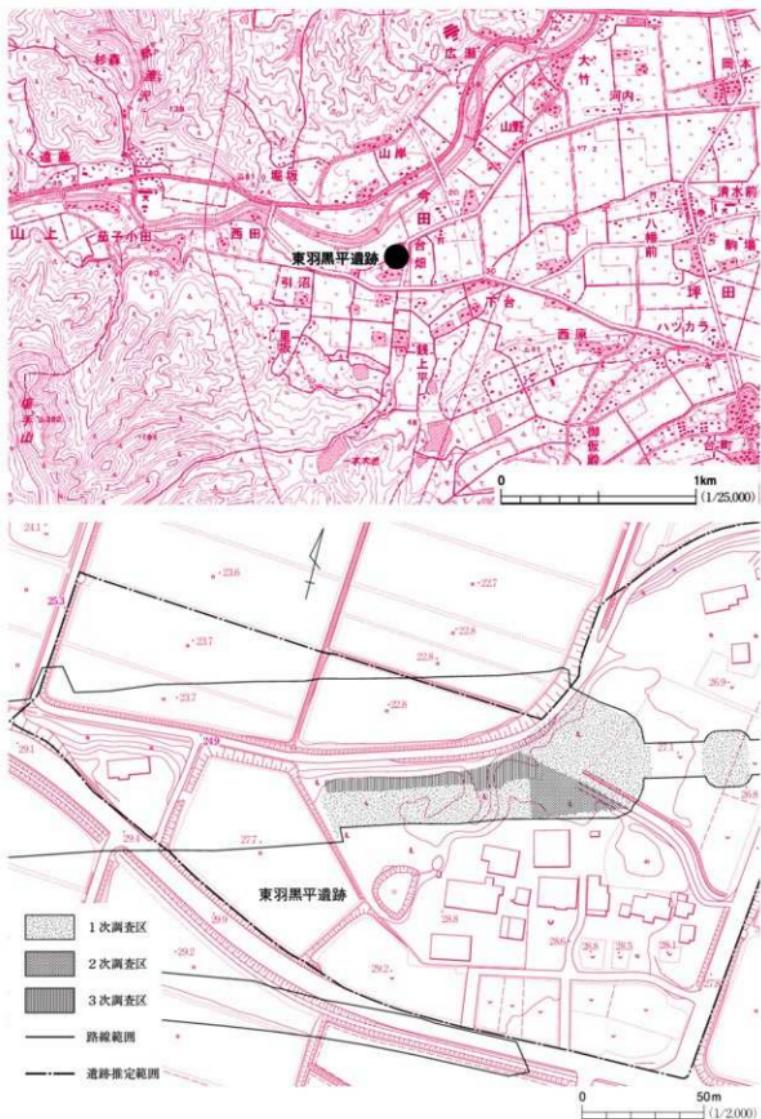


図1 遺跡・調査区位置図

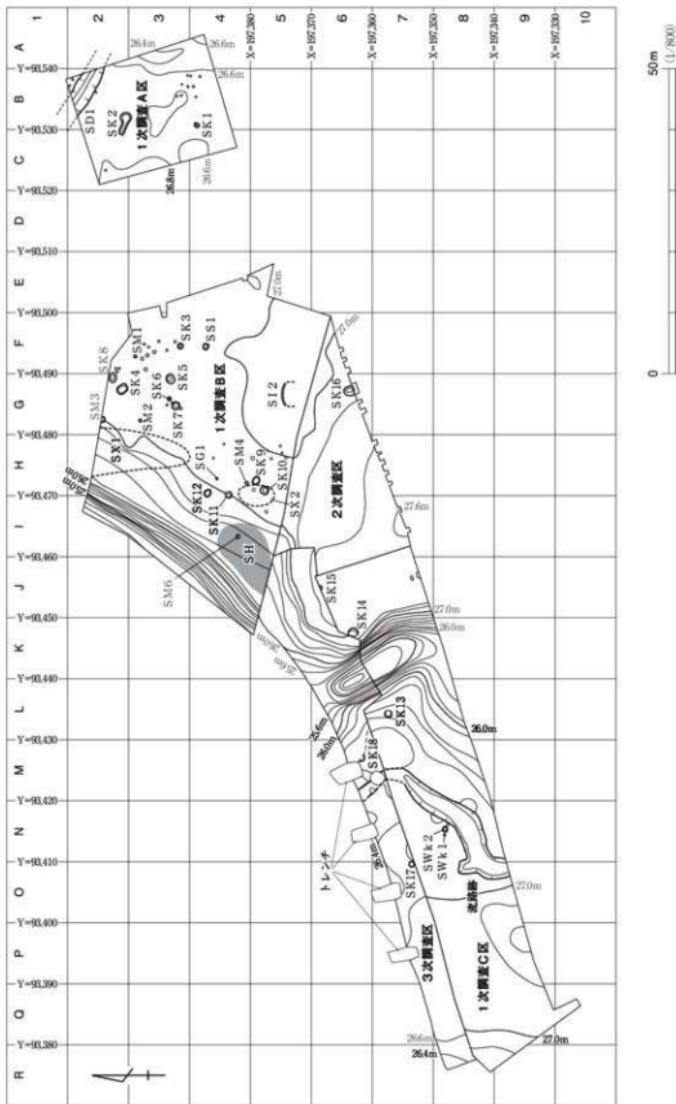


図2 1～3次調査区遺構配置図

第2編 東羽黒平遺跡（2・3次調査）

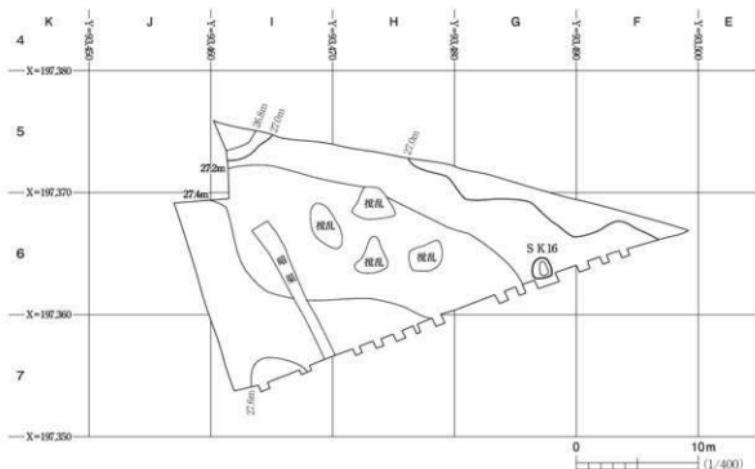


図3 2次調査区遺構配置図

し、7月中旬で調査を終了するおおよその見通しがついた。

その後、実質的な作業を7月17日までに終了し、器材を靈山道路に移動するための梱包作業を行った。そして、7月23日にプレハブ・トイレを撤去、7月28日に現地引き渡しを行って1次～3次にわたる東羽黒平遺跡の調査を完了した。

なお、今田研修所を会場として、10月17日に「相馬西道路 遺跡発掘調査成果報告会」を開催し、地域住民の参加を得ることができた。  
(菊田)



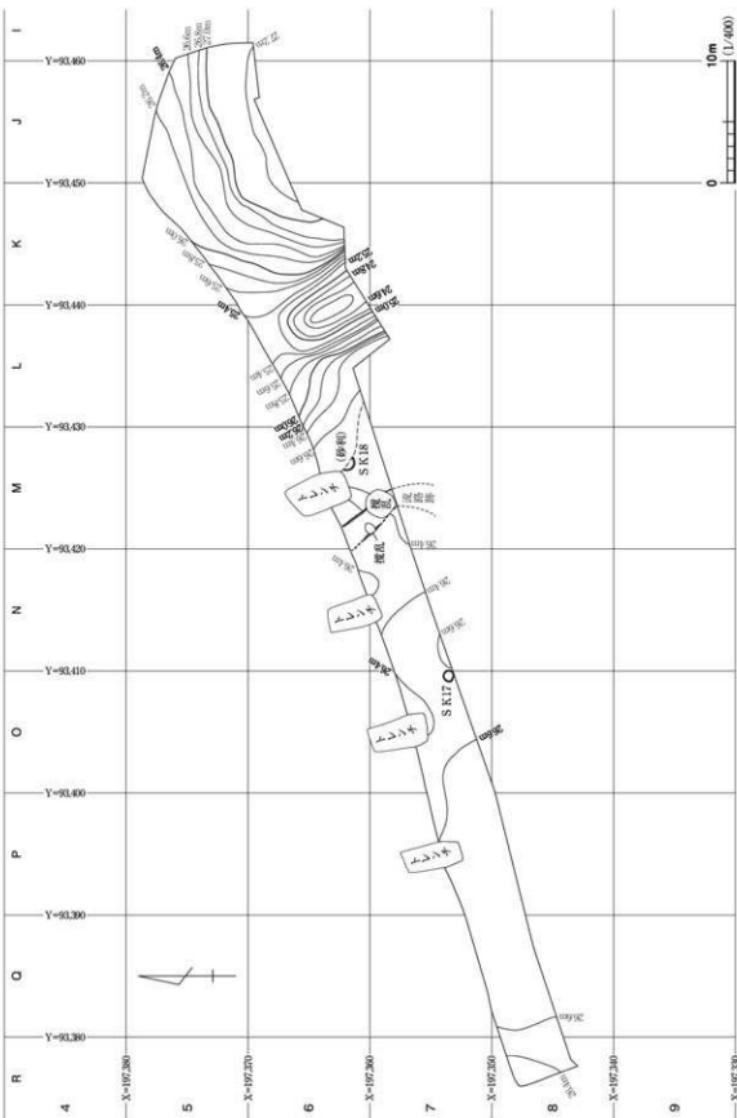


図4 3次調査区遺構配置図

## 第2章 発見された遺構と遺物

### 第1節 調査成果の概要と基本土層

#### 調査成果の概要

東羽黒平遺跡の2次調査では縄文時代の土坑1基、3次調査では縄文時代と平安時代の土坑各1基が発見された。また、遺構外からは縄文時代後期前葉の縄文土器片が定量出土したのをはじめ、縄文土器片を二次加工した土製品、土師器、石器などが認められ、それらの平面分布は1次調査B区に近いほど密度が濃くなる傾向が認められた。

以上の結果は1次調査の成果に沿うもので、報告書で示された見解(福島県教育委員会2015)をさらに補強することになったと言える。

なお、2次調査出土の炭化物の自然科学分析を行ったが、良好な結果が得られなかつたので、割愛する。

#### 基本土層

基本土層は、1次調査に準拠して色調・土質の諸特徴からL I～L Vに分層し、L IIはさらにL II a・L II b・L II cに細分している。

以下に説明する。

L I 暗褐色土(10YR3/4)である。客土・耕作土を含む表土層であり、層厚は10～30cmを測る。

L II a 暗褐色土(10YR4/3)である。しまりのあるやや粘質土であり、層厚は10～20cmを測る。  
縄文土器・土師器片を含む。

L II b 黒褐色土(10YR2/3)である。しまりのあるやや粘質土であり、層厚は10～20cmを測る。  
復元個体の縄文土器・土師器を含む。

L II c 暗褐色土(10YR4/3)である。L IIIとの漸移層であり、層厚は10cm前後である。少量の遺物を含む。

L III 褐色土(10YR4/4)である。しまりのあるやや粘質土であり、層厚は10～30cmを測る。  
遺物を含まない。

L IV 黄褐色土(7.5YR4/6)である。基盤層と考えられるが、層厚・平面分布にはらつきがある。上面は遺構検出面である。

L V 褐色砂礫土(10YR4/4)である。基盤の段丘疊層と考えられる。遺構検出面である。

(菅原)

## 第2節 出土土器の分類

2・3次調査で出土した土器については、1次調査の整理基準に準拠して、次のように分類した。

まず、全体を時期の違いで3つに大別した(I～III群)。このうち90%以上を占める縄文時代後期のII群土器は、器形A：口縁部から胴部にかけて屈曲を持たないか、屈曲が緩やかなもの、B：口縁部が外反し、頸部に屈曲を持つもの、C：口縁部文様帯を省略した樽形の器形や注口土器・小型土器のものに3分類し(器形A～C)、さらに口唇部形態や文様帯の配置、施文方法との組み合わせにより、1～15類に細分した。

### I群 縄文時代早期・前期の土器

- II群 縄文時代後期の土器 1類 器形A (屈曲なし)口縁部無文帯下に隆帯を添わせるもの
- 2類 器形A 無文帯下に沈線を添わせ垂下文、蕨手文を施すもの
- 3類 器形A 地文のみのもの
- 4類 器形A 無文のもの
- 5類 器形A 立体把手を持つもの
- 6類 器形B (屈曲あり)立体把手を持ち、胴部に渦巻き文・蕨手文を施す土器
- 7類 器形B 波状口縁・平口縁で胴部に渦巻き文・蕨手文を施す土器
- 8類 器形B 無文のもの
- 9類 集合沈線文土器
- 10類 器形C 壺形土器 注口土器 小型土器 異形土器
- 11類 三十稻場式系統の土器
- 12類 南三十稻場式系統の土器
- 13類 檜目文土器
- 14類 底部破片
- 15類 その他(小片・分類不可能なもの)

### III群 縄文時代晩期～中世の土器、近世陶磁器

以上のうち、2・3次調査で実際に出土したのは、II群1～3・6・7・9～11・15類、III群土器である。

(菅原)

### 第3節 土 坑

2次調査では土坑1基、3次調査では土坑2基を発見した。縄文時代と平安時代に営まれたものと考えられる。

#### 16号土坑 SK16（図5、写真5）

本土坑は2次調査区東側、G 6グリッドに位置する。検出面はL IV上面である。平面形は、南北方向にやや長い釣鐘状を呈している。規模は、長軸170cm、短軸160cm、検出面からの底面までの深さは最大35cmを測り、西側半分は深さ15cmと浅くなっている。周壁は、底面から緩やかな角度で立ち上がる。遺構内堆積土は1層のみ確認され、自然堆積土と思われる。

本土坑の堆積土中からは、縄文土器片が6点出土した。図5-1は、深鉢形土器の口縁部破片である。突起部には、比較的大きな貫通孔を中心に沈線文が施され、小さい盲孔が複数配置されている。Ⅱ群6類にあたる。

本土坑は、堆積土中から出土した遺物の年代観から、縄文時代後期前葉頃の所産と思われる。

（細 III）

#### 17号土坑（図5、写真5）

本土坑は、3次調査区中央のO 7グリッド、L IV上面で検出された。他の遺構との重複は認められなかった。

平面形はやや不整な円形で、規模は、長径90cm、短径82cmで、検出面からの深さは9cmを測る。西壁は急な角度で立ち上がり、東壁は緩やかに立ち上がる。底面は平坦である。東側3分の2程度は搅乱によって破壊されている。

堆積土は礫を少量含んだ暗褐色土1層である。遺物はロクロ土師器片が10点出土している。

本土坑の時期は、出土した遺物から平安時代と位置づけられる。性格は不明である。（由 井）

#### 18号土坑（図5、写真5）

本土坑は、3次調査区中央のM 6グリッド、L IV上面で検出された。他の遺構との重複は認められなかった。

平面形は、2分の1程度を搅乱によって破壊されてしまっているが、やや不整な円形であると考える。規模は、遺存しているところで長軸127cm、短軸50cmで、検出面からの深さは28cmを測る。壁は、急な角度で立ち上がり、底面は緩やかに傾斜しているが、搅乱によって破壊されている。

堆積土は2層に分かれ。ℓ 1は礫を微量含んだ褐色土、ℓ 2は小礫を少量含んだ褐色土である。遺物は縄文土器片が3点出土している。

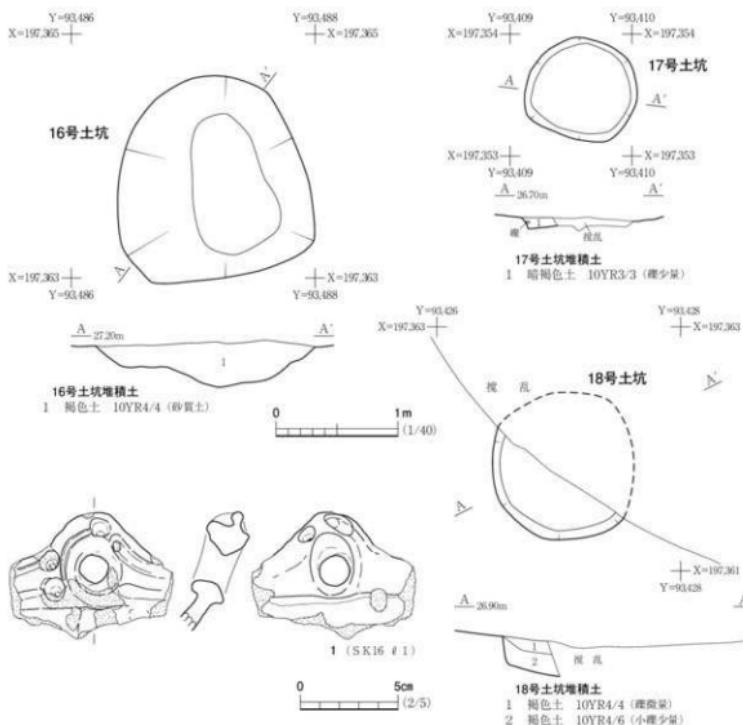


図5 16~18号土坑、16号土坑出土遺物

本土坑の時期は、出土した遺物から縄文時代と位置づけられる。性格は不明である。（由井）

#### 第4節 遺構外出土遺物

2・3次調査では、遺構外から比較的まとまった量の遺物が出土した。内訳は次のとおりである。

◎2次調査 611点(縄文土器片534点、土師器片62点、須恵器片5点、陶磁器片4点、石器6点)

◎3次調査 223点(縄文土器片210点、土師器片10点、石器3点)

それらの平面分布をみると、2次調査ではほぼ調査区北部、3次調査では調査区東部に多く、遺構・遺物の集中した1次調査B区からの広がりであることが分かる。

ただし、層位的には安定した出土状況を示さず、L Iとして取り上げたものがほとんどである。

これは遺物を含む土層の堆積が薄く、木根の搅乱などで表土化してしまったためと考えられる。種別は縄文土器が90%で圧倒的に多く、他に須恵器、土師器、縄文土器片を二次加工縄文した土製品、石器が認められる。

以下、図示した65点を解説し、土器については1次調査の報告基準に準拠した形で記述を行う。

### 【土 器】

土師器1点を除くと、他はすべて縄文時代後期前葉の縄文土器（II群）で占められる。

図6-1・2は器形Bで、立体把手を持ち、垂下文を施すものである。II群6類にあたる。複数の盲孔を持つ1の類例は、16号土坑から出土している（図5-1）。図6-3～8、10～13・22は器形Aで、無文帯下に沈線を添わせ、垂下文ないし蕨手文を施すII群2類である。このうち4～6は、突起した口唇部に円形刺突を施している。また、口縁部を欠損し、文様展開がはっきりしないが、図6-20・25・26・28・30、図7-2・3・5～9・12・13・17・18・20・22も、II群2類に該当するものと推定される。

図6-9は、器形Cの注口土器とみられ、II群10類に比定できる。口縁部下に沈線を添わせ、渦巻き文ないし蕨手文を施している。

図6-14は器形Aで、口縁部無文部下に隆帯を添わせたII群1類である。隆帯下には地文が残る。図6-21・23・24・27は、胴部の立ち上がり具合から器形Bとみられ、胴部に渦巻き文ないし蕨手文を施すことから、II群7類に比定される。

図6-29は、先端の丸みを帯びた工具で連続刺突文を施しており、II群11類にあたる。

図7-1・4・14は集合沈線文を施したII群9類、同図11・15・16・19・21・23～25は、地文のみのもので、II群3類に該当する。

図7-26・27は、底部片のII群15類である。

図7-29は、唯一のロクロ土師器でIII群にあたる。湯釜に使用された長胴壺であり、口縁部～胴部上半近くが遺存している。

### 【土製品】

図7-28は、縄文土器片を2次加工した、円盤状土製品である。素材の縄文土器片は、太い沈線が施されたもので、II群に比定される。

### 【石 器】

図8-1～3は、打製石斧である。1は撥形、2は分銅形、3は短冊形を呈し、それぞれタイプが異なっている。石質は1・2がホルンフェルス、3が頁岩とみられる。図9-1は、緑色岩製の磨製石斧である。

図9-2は、二次加工のある剥片、3は裏面加工の搔器で、梢円形を呈している。石質は2が赤玉、3が凝灰質砂岩とみられる。

（菅原）

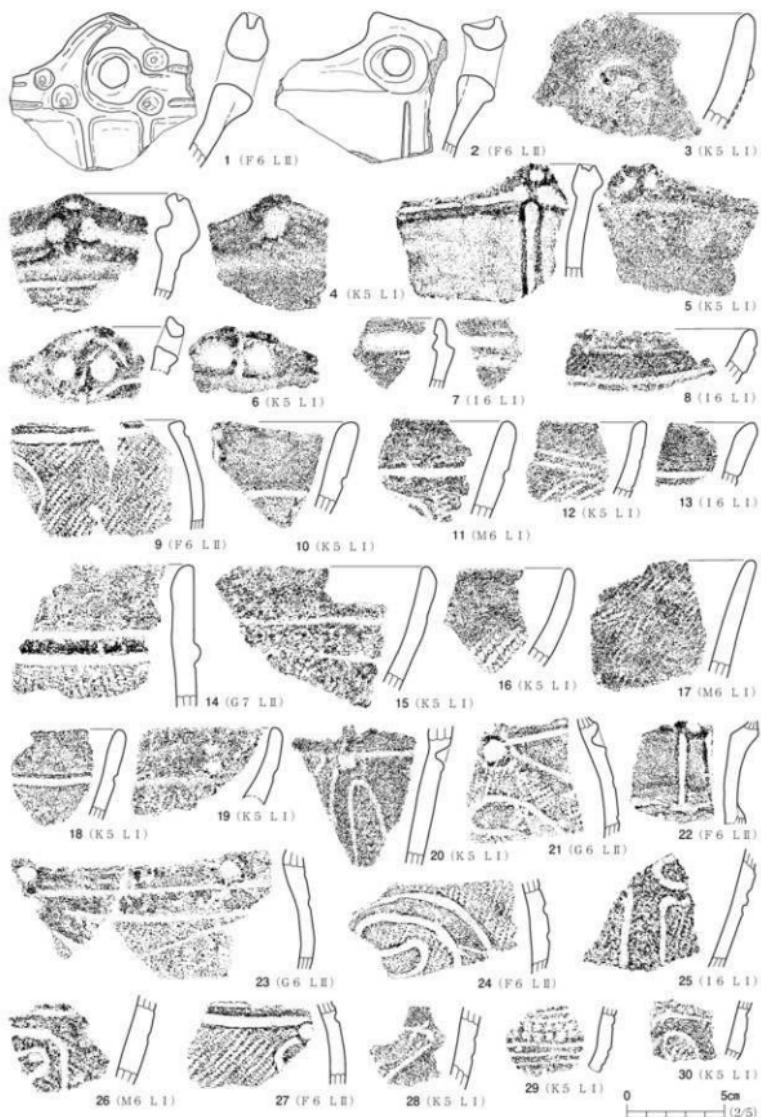


図6 遺構外出土遺物（1）

第2編 東羽黒平遺跡 (2・3次調査)

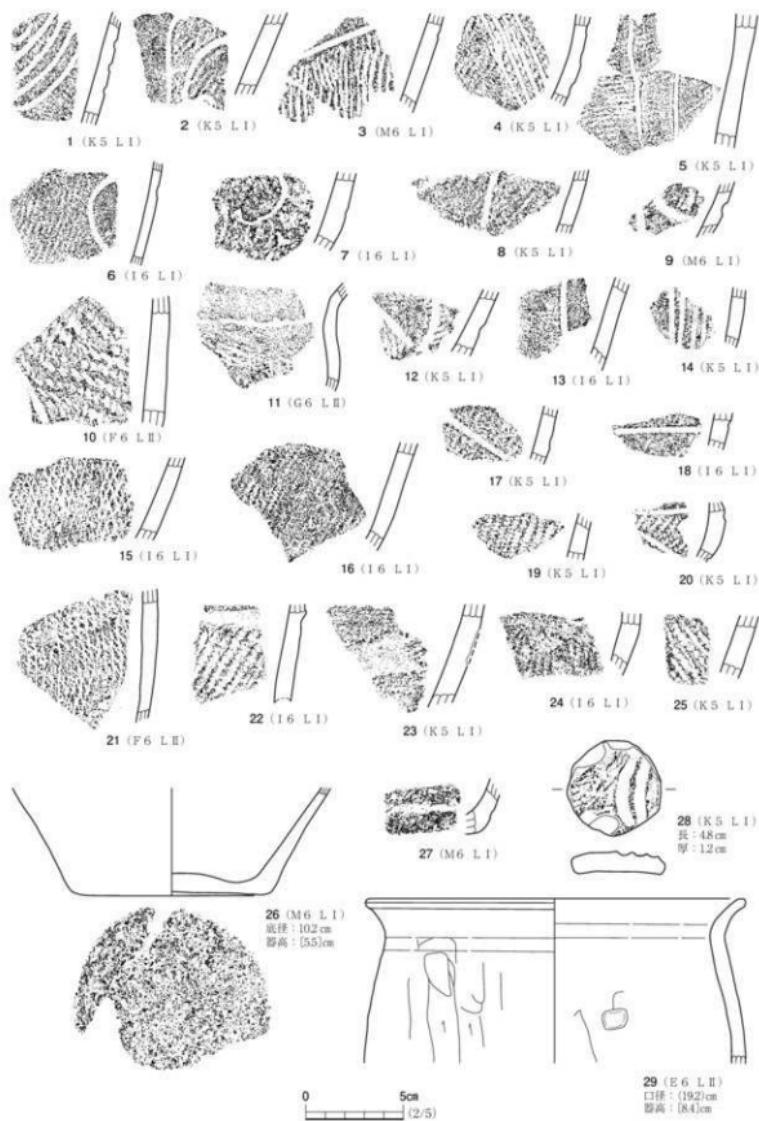


図7 遺構外出土遺物 (2)

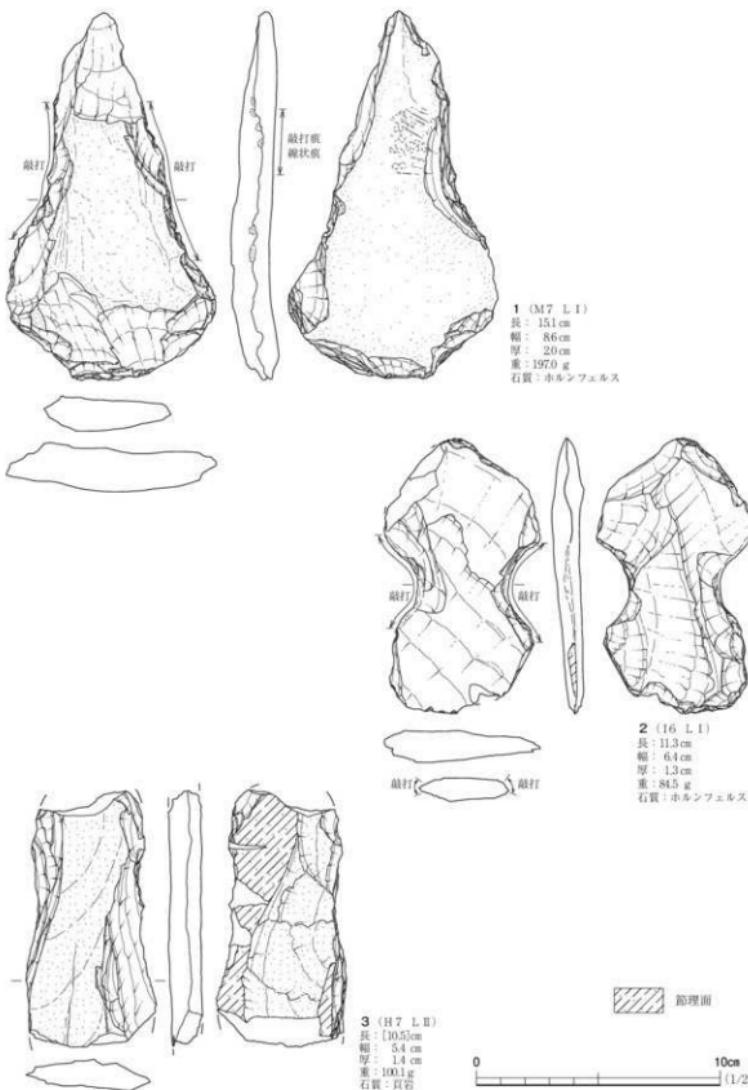


図8 遺構外出土遺物（3）

第2編 東羽黒平遺跡（2・3次調査）

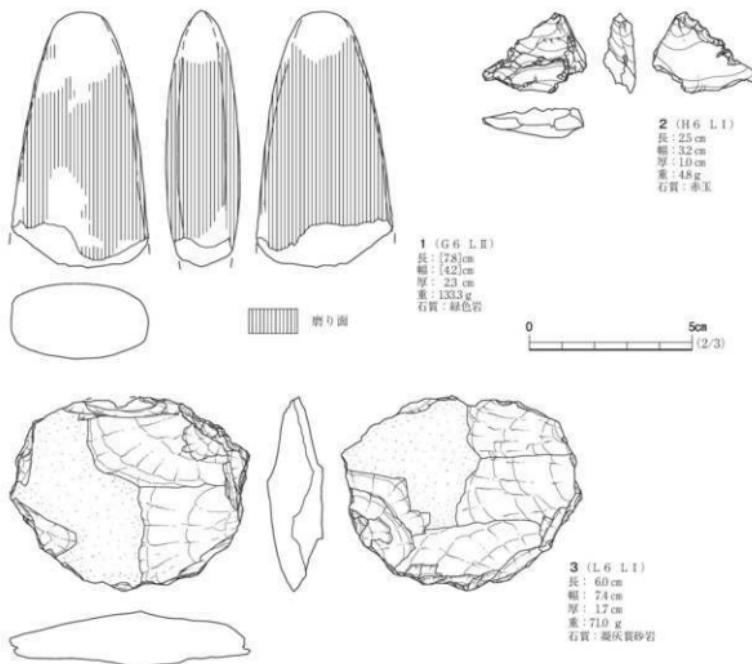


図9 遺構外出土遺物（4）



## 第3章 まとめ

東羽黒平遺跡の2次調査では土坑1基、3次調査では土坑2基が検出され、遺構外を中心に、縄文土器片744点、須恵器片5点、土師器片72点、陶磁器片4点、石器9点が出土した。それら遺構・遺物の平面分布は、1次調査B区(福島県教育委員会2015)からの広がりで捉えられる。

以下、この結果を踏まえ、1~3次にわたる調査成果を要約しておく。

- ① 検出遺構は、竪穴住居跡1軒、土坑18基、土器埋設遺構5基、鍛冶炉跡2基、溝跡1基、性格不明遺構2基、集石遺構1基、焼土遺構1基、遺物包含層1ヵ所である。遺物は、縄文土器片13,744点、須恵器片5点、土師器片72点、陶磁器片284点、石器309点、石製品3点、土製品14点を数える。
- ② 主体をなす縄文時代の遺構は、土坑14基、土器埋設遺構5基、集石遺構1基、焼土遺構1基、遺物包含層1ヵ所が該当する。多くは1次調査B区の北側および西側に位置しており、帰属時期は出土遺物の特徴などから後期前葉に求められる。
- ③ また遺物では、ハート形土偶を含む複数個体の土偶の他、土製腕輪、スプーン状土製品、小型土器、石刀、石棒が特筆される。
- ④ 当該期の集落の中心域は、段丘面が舌状に伸びる調査区外の北側に広がっていた可能性がある。
- ⑤ 平安時代の遺構は、竪穴住居跡1軒、鍛冶炉跡2基、土坑2基が該当する。竪穴住居跡の時期は、出土土師器の特徴などから9世紀中葉~後半に求められ、他の遺構も近接時期と考えられる。
- ⑥ 当該期の集落は小規模であるが、宇多川対岸の400m圏内に東北最古の火葬墓を導入した山岸硝庫跡、ならびに関連する豪族居宅跡の明神遺跡(序章図4-23・24)が位置している(菅原2015)。また、宇多川下流の3km圏内には、郡衙周辺寺院の黒木田遺跡(同図29)があり、古代宇多郡域の景観を知る上で貴重な所見となった。

(菅原)

### 引用・参考文献

- 馬日順一 1977 「いわゆる「網取貝塚C地区」の土器について」『考古』第19号
- 福島県教育委員会 2015 「一般国道115号相馬福島道路遺跡発掘調査報告1 東羽黒平遺跡(1次調査)」
- 菅原祥夫 2015 「製鉄導入の背景と城壁・国府、近江」『月刊考古学ジャーナル 特集東北古代史の再検討』No.669 ニューサイエンス社
- 三春町教育委員会 1992 「西方前遺跡III」
- 八重樫純樹他 1994 「土偶シンポジウム2 秋田大会 東北・北海道の土偶I」「土偶とその情報」研究会編
- 福島県教育委員会 1996 「三春ダム関連遺跡発掘調査報告8 越田和遺跡」

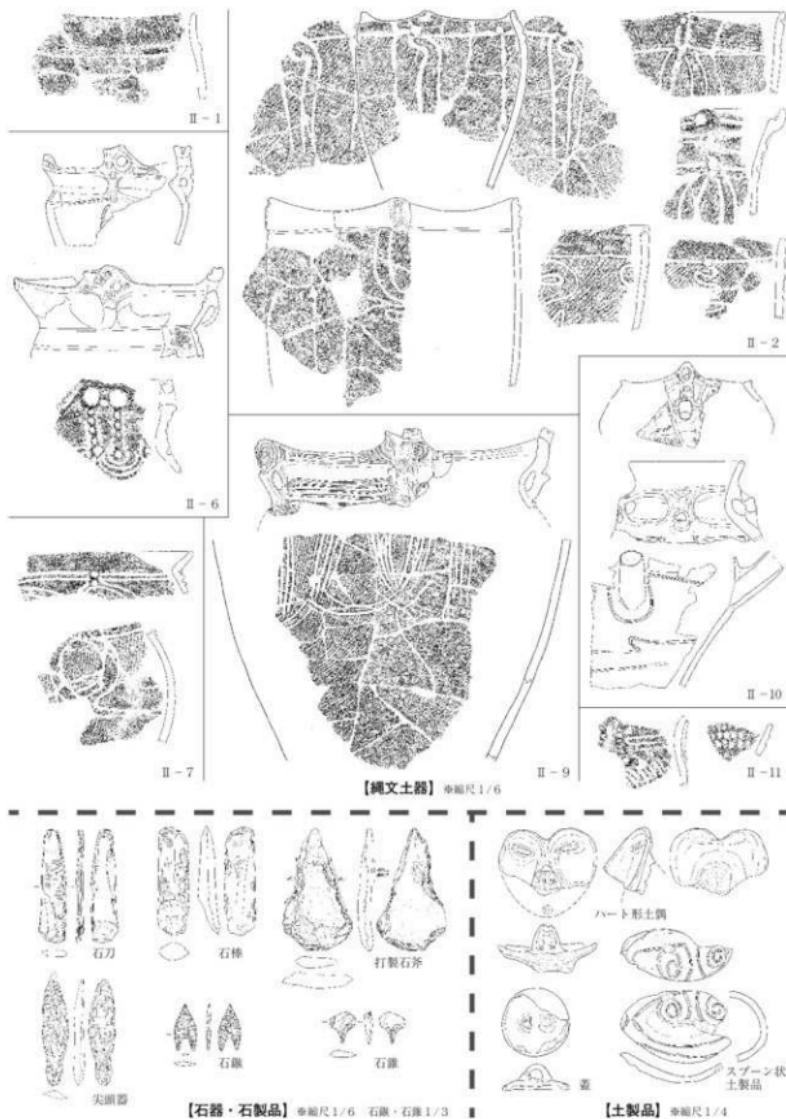


図10 主要遺物の集成

写 真 図 版

第 1 編 横川 B 遺跡





1 調査区遠景（東から）



2 調査前現況（東から）

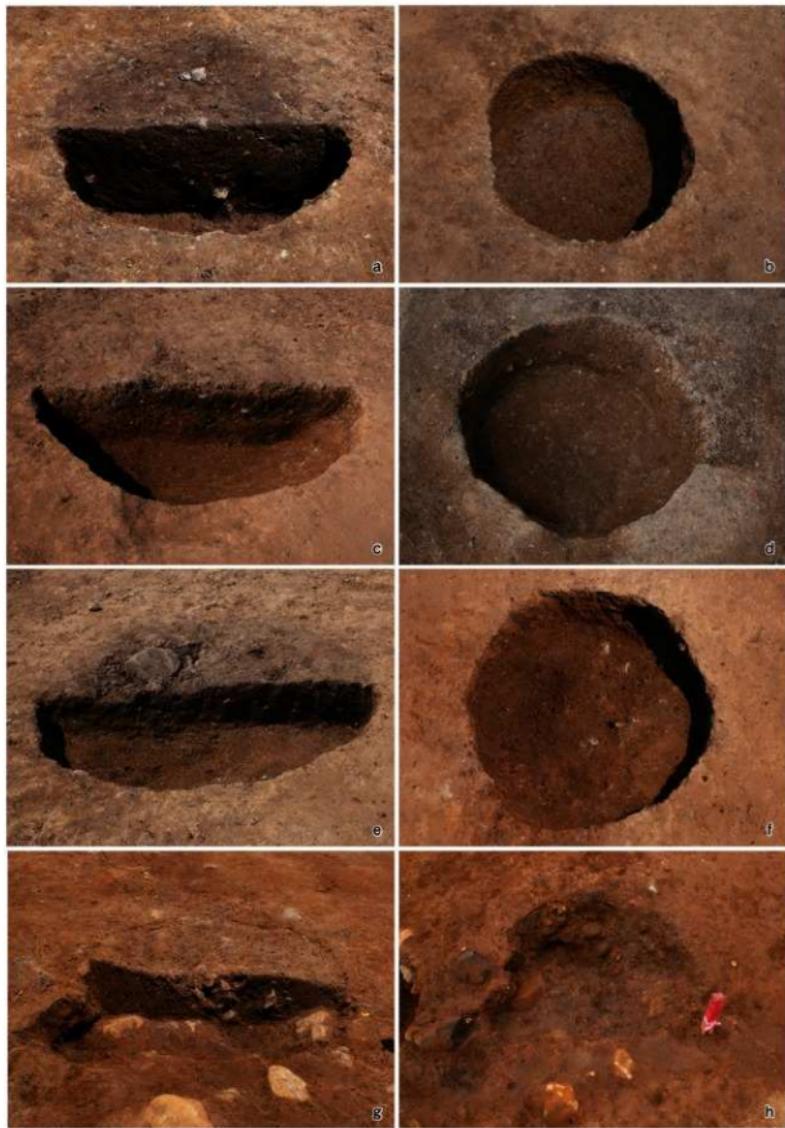
第1編 横川B遺跡



3 調査区全景（東から）



4 1・2号土坑



5 3～6号土坑

a 3号土坑断面（南西から）	b 3号土坑全貌（南から）
c 4号土坑断面（南から）	d 4号土坑全貌（南から）
e 5号土坑断面（南西から）	f 5号土坑全貌（南西から）
g 6号土坑断面（南から）	h 6号土坑全貌（南から）

第1編 横川B遺跡



6 7号土坑、作業風景

a 7号土坑断面（南から）  
b 7号土坑全景（南から）  
c 7号土坑作業風景（北から）  
d 作業風景（東から）



7 3号土坑出土遺物

# 写 真 図 版

第2編 東羽黒平遺跡（2・3次調査）





1 2次調査区全景（東から）



2 3次調査区全景（東から）

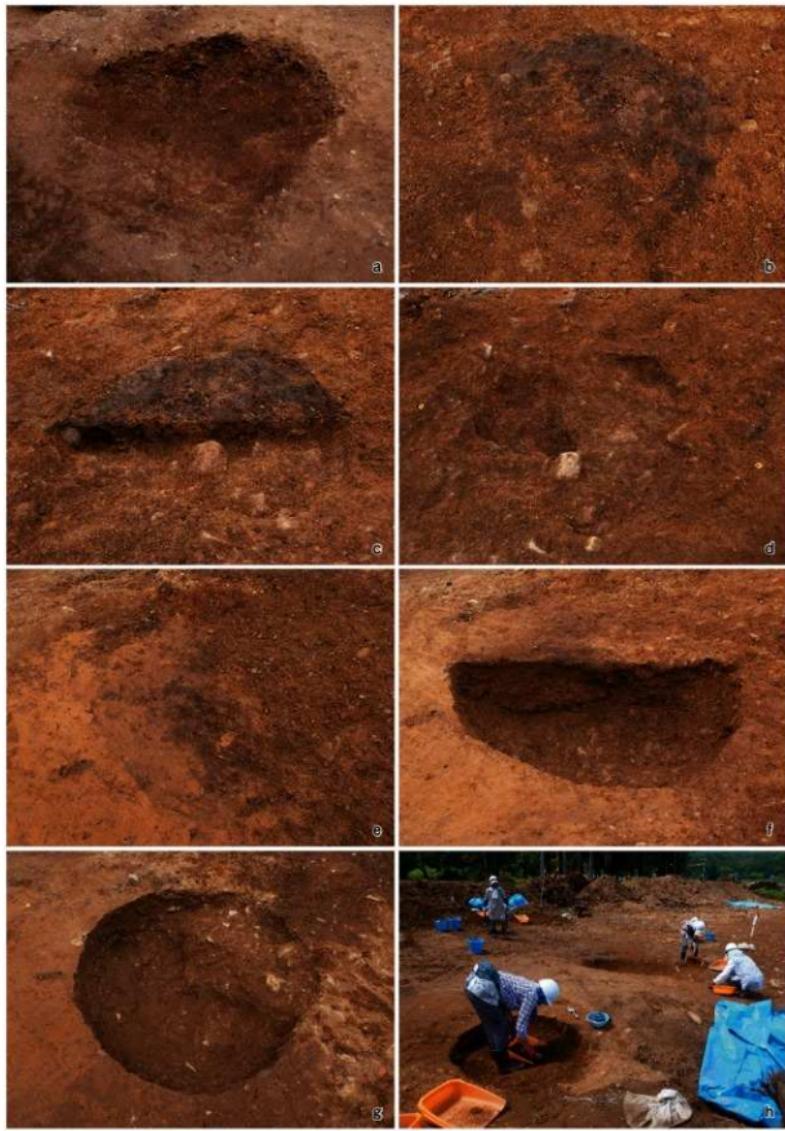
第2編 東羽黒平遺跡（2・3次調査）



3 3次調査区遠景（北西から）



4 3次調査区全景（西から）

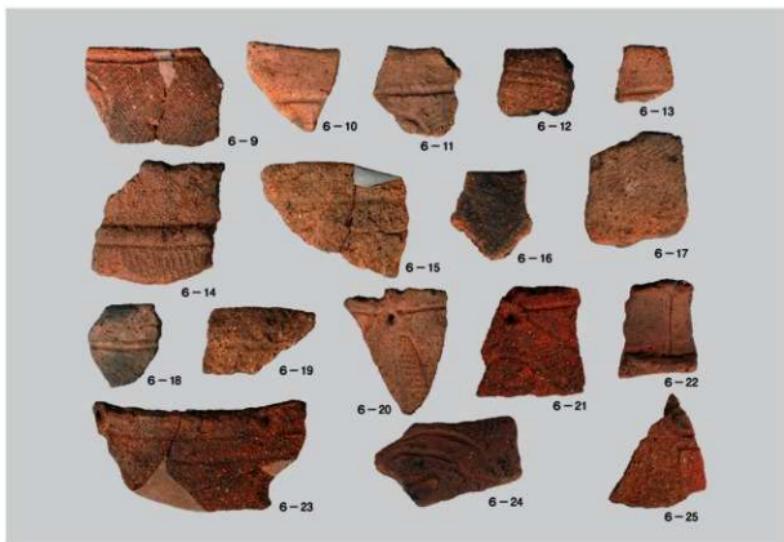


5 16～18号土坑、作業風景

a 16号土坑全貌（南から）  
 b 17号土坑換出状況（南から）  
 c 17号土坑断面（南から）  
 d 17号土坑全貌（南から）  
 e 18号土坑換出状況（南から）  
 f 18号土坑断面（南から）  
 g 18号土坑全貌（南から）  
 h 作業風景（北東から）



6 遺構外出土遺物（1）



7 遺構外出土遺物（2）



8 遺構外出土遺物（3）



9 遺構外出土遺物（4）

第2編 東羽黒平遺跡（2・3次調査）



10 遺構外出土遺物（5）



11 遺構外出土遺物（6）

## 報告書抄録

ぶりがな	いっぽんこくどう115ごうそうまふくしまどうろいせきはくつちょうきほく4						
書名	一般国道115号相馬福島道路遺跡発掘調査報告4						
シリーズ名	福島県文化財調査報告書						
シリーズ番号	第511集						
編著者名	菅原祥夫 小暮伸之 斎田順幸 佐藤悦夫 細山郁夫 由井文菜 荒木麻衣						
編集機関	公益財団法人福島県文化振興財団 遺跡調査部 〒960-8115 福島県福島市山下町1-25 TEL024-534-2733						
発行機関	福島県教育委員会 〒960-8688 福島県福島市杉妻町2-16 TEL024-521-1111						
発行年月日	2016年3月23日						
所収遺跡名	所在地	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
横川 B	ふくしまけんあさひなまちやまとやまと 福島県相馬市山上字横川	2095	00216	37°46'05"	140°51'56"	20150512 20150604	1,600m <sup>2</sup>
東羽黒平 (2・3次調査)	ふくしまけんあさひなまちやまと 福島県相馬市今田字東羽黒平	2095	00212	37°46'24"	140°53'40"	(2次調査) 20140804 20140926 (3次調査) 20150623 20150717	500m <sup>2</sup> 800m <sup>2</sup>
所収遺跡名	種類	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
横川 B	集落跡	近世	土坑 7基	陶器	円筒状を呈する土坑が、7基発見された。うち1基から大腹相馬焼が出土している。		
東羽黒平 (2・3次調査)	集落跡	縄文時代 平安時代	土坑 3基	縄文土器 土師器 石器	縄文時代の土坑2基、平安時代の土坑1基が検出された他、遺構外から縄文時代後期前葉の土器片、石器がまとまって出土した。 また、土師器も小数出土している。		
要約	横川B遺跡では近世集落に伴う遺構、東羽黒平遺跡(2・3次調査)では、主に縄文時代の集落に伴う遺構・遺物が発見された。						

※総面積は世界測地系(平成14年4月1日から適用)による。

福島県文化財調査報告書第511集

### 一般国道115号相馬福島道路遺跡発掘調査報告4

#### 横川 B 遺跡 ひがしあわらだいら 東羽黒平遺跡 (2・3次調査)

平成28年3月23日発行

発行	公益財団法人福島県文化振興財団 遺跡調査部 福島県教育委員会	(〒960-8115) 福島県福島市山下町1-25 (〒960-8688) 福島市杉妻町2-16
	公益財団法人福島県文化振興財団 国土交通省東北地方整備局磐城国道事務所	(〒960-8116) 福島市春日町5-54 (〒970-8026) いわき市平字五色町8-1
印刷	共栄印刷株式会社	(〒963-0724) 郡山市田村町上行合字西川原7-5

